「……。」

「何分、取込中の事ですから――では、御免下さいませ。」

宮子は、わざとらしく丁寧な挨拶を殘して、出て行つた。

萬千子は、ぴしやりと障子をしめると、そのまゝそこに崩折れた。――涙の滲んだ眼の視線を空におき忘れ、わなく唇を、強く〳〵、嚙みしめ〳〵してゐた。

宮子の乘つて來た自動車の警笛の音が路地の入口の方から聞えた。やがて走り出したらしい自動車の轍の音が、嘲笑の聲のやうに萬千子の耳にはきゝなされた。

宮子の自動車が走り出して間もなくだつた。外燈の灯影が、そこに一人の男の姿を映し出した。

彼は石田辰夫だつた。辰夫は大川につかまへられて、品川の方の爭議の現場に出かけて行つたのだが、その爭議本部の、白熱した戰鬪的雰圍氣の中で、ともすれば惘然自失する自分をそこに見出すのであつた。辰夫は、近頃運動に冷淡になつたといふ事で同志の信頼を失ひつゝあつた。（裏切者）と罵る者もあれば（スパイ）などゝ極端な惡聲を放つ者さへあつた。今度、大川が無理にも辰夫を引つ張り出したのは、今度こそうんと働かせて、辰夫をして名譽回復をさせようとする同志的友情からであつたが、辰夫は一向燃えなかつた。炎々と燃えあがる石炭の堆積の中の、一つの石塊でもあるかのやうな辰夫だつた。――彼は萬千子の事で一ぱいだつた。萬千子に會ふ事で一ぱいだつた。一人の女性萬千子を對象としての、この昔ながらの古い情熱にくらべれば、階級愛、同志愛といふが如き殆どいふに足らぬものゝやうに思はれた。周圍を埋めてゐる悲憤の叫も、激昂の呻も、眼前千里、まるで自分とはかゝはりのないものに思はれるのであつた。

部署にもつき、評議にも與かつたが、そこに少しも積極的な情熱が働いてゐないといふ事は何人の眼にも分つた。

「石田！　君は一體どうしたといふのだ？」

大川は、蔭へ廻つて叱咤した。

「どうもしやしない。」

「どうも、しないんなら、何故そんなにぼや〳〵してゐるんだ。」

大川は罵つた。

――が、その罵りに對しても返す言葉を知らぬ辰夫だつた。

彼は、こつそりと本部をすり抜けて來た。――そして、萬千子を訪ねて來たのであつた。彼は一刻でも早く萬千子に會ひたかつた。

彼は、その路地の入口の處に立つた。もう十二時に近かつた。たとひ、夜の勤に出てゐるとしても、今ならば、きつと歸つてゐるであらう。

彼がさう思ひながら、路地の中へ踏み入らうとした時だつた。

「石田さん！」

と、後から呼びとめる聲がした。

四

辰夫は、驚いて振返つた。

「どこへ行くんだ。石田さん！」

さういつたのは、今のさつきまで、爭議本部で働いてゐた渡邊といふ男であつた。渡邊の後には、もう一人、職工服の爭議團員が殺氣立つた顏をその肩越に見せてゐた。

辰夫は、狼狽して、頓には返事も出來なかつた。

「どこへ行くんだ？」

相手は重ねて訊いた。きら〳〵と眼を輝かし、低いが、怒氣の溢れた聲だつた。

「一寸――一寸、用があるのだ。」

「何の用なんだ？――何の用があつて、こんな處をうろついてゐるんだ？」

相手は無遠慮にきり込んで來た。

「君は、僕の後をつけて來たのか？」

辰夫も、腹立たしく問ひ返した。

「もちろんだ。」

「何のために、人の後をつけたりなんかするんだ？」

「君の行動を監視するためだ。」

「監視？」

「さうだ。大川さんから、おれはそれを命ぜられたのだ。」

「大川が、僕を監視するやうに君に命じたのか？」

「さうだ。」

「何のために僕を監視するんだ？」

「石田さん。君は何のために、こんな處をうろついてゐるんだ？――君がどうするか後をつけて見て來いとおれたちは大川さんにいひ付けられたのだ。それで、君の後をつけて來たんだ。」

「それは御苦勞樣だな。」

辰夫は口許を引歪めた。

「石田さん！　君がスパイになつたつて噂は前から聞いてゐた。おれはまさかと思つてゐた。だが、今夜の君の、こんな妙な行動を見ると、そんな噂も、まんざら出鱈目ばかりぢやなささうだな。」

相手は、辰夫の顏をぢつと睨みつけるやうにしていつた。

「何を馬鹿な事をいふんだ！」

辰夫も思はずくわッとして、相手を睨みかへした。

「こつそりと脫け出して、こそ〳〵と、一體何處へ行かうてえんだ？」

「僕の――私用だ。」

「私用？」

と、相手は問ひ返したが、

「あすこに、會社の重役の瀨木の邸がある。」

さういひながら、顎を、つい二三町先の大きな邸の方へしやくつて、

「あすこへ行かうとしたんぢやねえのか？　內通でもしようてえのぢやねえのか？」

相手は性急にたゝみかけた。

そこが會社の重役の邸である事などは全く知らなかつた辰夫にとつて、これは意外な嫌疑だつた。スパイだの、內通だのと、全く思ひ掛けぬいひがゝりだつた。辰夫は激しい屈辱を感じた。

「何をいつてるんだ？」

辰夫は、滿身の怒に顫へながら唇を嚙んだ。

「さうと外思へないぢやねえか？　でなかつたら、今頃こんな處へ、どうして來たんだ？」

「僕は、この路地の奧に訪ねる人があるんだ。」

「は、は！　際どいところで見つけられたんで、こんな處へ逃げ込まうてんだらう？」

渡邊は、肩をゆすつて嘲笑つた。

「馬鹿なことをいふな！」

「大川さん初め、みんな、君の態度にやすつかり憤慨してゐるんだ。本當に、君自身に疚しいことがないんなら、これからおれたちと一緒に歸つて、釋明し給へ。」

辰夫は、屈辱と怒のためにがく〳〵と頤を顫はしながらも、答ふる言葉を知らなかつた。

「は、は！　釋明が出來ないだらう？」

渡邊は再び嘲笑つた。

その嘲笑と、そして疑惑とを背後に、路地の中に踏み入るだけの勇氣が辰夫にはなかつた。辰夫は、相手の顏を屹と睨みつけながら、謂はゞ、進退兩難といふかたちで、そこに立ち竦んでしまつた。

地上の愛

一

啓三郎は、天上の結婚を夢みながら幸福に死んで行つた。

彼の愛がいかに深い、いかに眞實なものであつたか？　彼は死によつて萬千子にそれを語つた。彼は、文字通り生命を賭けて――死を以て、彼女を愛したのだ。

生命を賭けた愛には生命を以て酬いねばならぬ。死の愛には、死を以て酬いねばならぬ。この想念が強く彼女を動かした。まことに、いかに屢々、萬千子は死を思つたらう。いかに屢々そこに啓三郎が待つてゐるであらうところの、彼の漂渺たる未知の世界へと、その魂を誘はれた事だらう。

一人の弟の千尋のためにも、萬千子は生きねばならなかつた。千尋が、未決監から出されたのは、意外に早く、啓三郎の死後二三日經つてからであつた。千尋の進んで行きつゝある道が、どんな道であるかは萬千子にも理解されが、萬千子は、矢張、思ひきつてその死の誘に身を委ねる事が出來なかつた。

た。青年の血氣に任せての、矯激な、むしろ狂躁的な千尋の振舞が萬千子を悲しませたとはいへ、千尋の選んだ道が、決して間違つた道では無いといふ事は、萬千子にも十分理解された。萬千子自身がすでに、汗にしめつたパンに生きる人間の一人である以上、彼女の生活上の實感が、それを理解させ、更にそれを肯定させもした。千尋の選んだ道、そしてあの辰夫の踏んで行つた道――新しい世紀の地平線に向つて、一直線に、踏み開かれて行きつゝあるその道を、自分もまた、彼等と共に勇ましく進んで行く事を萬千子は思はないではなかつた。――しかし、萬千子は、自分が、彼等の同伴者たるべく、十分な脚力を持つてゐない事を自覺せざるを得なかつた。

「姉さんは、それでいゝのですよ。まさか姉さんにや、女工にもなれませんからね。」

慰め顔にそんな事をいひながらも、千尋は、

（姉さんには、まあ、それがせいぐなんでせう。矢張、姉さんは駄目だ。）

さういひたげな眼付をした。そして、その眼付に對して、何の抗議も出來ない自分であることを萬千子は知つてゐた。この世の中に立つて、どんな風に生きられた自分であつたか？　一年足らずの經驗が彼女にそれを示した。生活者としての自分が、いかにみじめな弱々しい無力な者であつたか？　彼女は今はつきりとそれを知つた。――あの時、辰夫は自分を拒んだ。どんな嶮しい道であらうとも、どこまでもついて行くといつた自分を、辰夫は、拒んでそして追ひ返した。拒まれても、追ひ返されても、仕方のない自分であつた事を、萬千子は今はつきりと思ひ知るのであつた。

萬千子は、辰夫にとつてさうであると同樣に、千尋にとつても所詮同伴者であり得ない自分である事を知つてゐる。自分は千尋にとつて、畢竟、無用な人間に過ぎないであらう？――しかし、萬千子は矢張、千尋を捨てゝ、自分の身ひとつだけを潔くする氣にはなれなかつた。この世の中に頼り無い孤兒として殘された同胞の、一人の弟に對する一人の姉としての愛情がそれを許さなかつた。役に立つだけは、千尋のために役に立たなければならぬ。生きられる限は、千尋のために生きなければならぬ。さう萬千子は思ふのだつた。

だが、萬千子をこの地上の愛着に繫ぐものは、たゞ、千尋だけであつたらうか？

否、否！　さうではなかつた。そこに、もう一人がゐた。――それは石田辰夫だつた。

彼女を拒み、彼女を追返した辰夫が、その後、激しい後悔の中に、彼女を求めつゞけ探しつゞけてゐるといふ事を美代子の口から聞いた時、萬千子は、わッと全身の血が湧く思がした。すぐにも飛んで行つて、會ひたいやうな氣さへした。會ひたくない！　會はない！　さう美代子にはいつたが、心の底では、再び辰夫と會ふ日をひそかに思ひ描

かないではなかつた。

が、その時、突然起つた啓三郎との再會、そして啓三郎の死！――萬千子は、自分の心が、今や死んだ啓三郎の手に摑み去られてしまつた事を感じた。

とはいへ――現身の惱は深い。地上の人間は、苦しい矛盾に生きねばならなかつた。萬千子の心は矢張、辰夫に向つて動いてゐた。

二

最初辰夫が訪ねて來た時は、萬千子は病院の方へ出掛けた留守だつたので、辰夫が訪ねて來たといふその事すら知らなかつた。萬千子が、辰夫の來訪を知つたのは、啓三郎の死後二三日のある日の事だつた。

「さうですよ。石田さんと仰有いましたよ。背丈の高い立派な方でしたよ。」

留守居に頼んで置いた近所の老婆からさう聞かされた時、萬千子は、五體のわなゝきを感じた。――だが、その時萬千子は、啓三郎の殘して行つた悲しみの中に溺れ切つてゐた、そして、「死」をさへ手近に凝視てゐた。今更會つてどうしよう？　留守でよかつたと、直ぐさう思つた。

その次の日、三度目に辰夫が訪ねて來た時は、老婆に、留守だといはせて、襖の蔭に、ぢつと呼吸を殺してゐた。老婆と辰夫との押問答に耳を欹てながら、やがて歸り去る靴の音が聞えなくなるまで、火の思氷の思にわなゝき喘いでゐたその氣持が、萬千子に、あの啓三郎が訪ねて來た時の事を思ひ出させた。

啓三郎！　あの人をもこのやうにして會はずに歸した。辰夫をだつて、かくして歸すより外ない筈ではないか？

萬千子はさう思ふのだつた。

「いろ〳〵の事を訊いて行きましたよ。どこへ勤めてゐるのかだの、いつ歸るかだの、いつ來たら會へるかだの――。

まあ、い〻加減に返事をしときましたがね。どうしてまた、會つておやりなさらないのかね？」

老婆は不思議さうに訊いた。

「會ふ氣になれないから會はないのよ。」

「會つちやならないわけでもおあんなさるのかね？　あの人に會つちや、外に濟まない人でもあるといふやうなわけあひでも？——」

譯知らしい老婆が、齒ぐきを出してにや〳〵と笑ふのを、萬千子はいくらか涙ぐんだ眼で見返しながら、

「外に濟まない人が——え〻、え〻、あるのよ。」

わざと運ッ葉な調子で答へて笑つて見せた。

萬千子が、急にまた住居をかへたのは、千尋のゐない後の獨住に都合が悪いためといふ以上に、その會ふまじき來訪者を避けようがためだつた。

會ふまじき來訪者！　萬千子は、決して辰夫に會ふまいと覺悟した。

が、そこに彼女の矛盾があつた。會つてはならぬと思ひながら、決して會ふまいと覺悟しながら、ともすれば、辰夫に向つて靡いてゆく心を、萬千子はどうする事も出來なかつた。すでに死んだ啓三郎に捧げつくした心と思ひきめながら、現身ゆゑの愛着は、その古い戀人からまだ斷ちきれずにゐたのだつた。日が經ち、時が經つにつれ、啓三郎を忘れるといふのではなかつたが、辰夫への思慕が、遣瀨なく興じて行くのを、萬千子はどうする事も出來ないのだつた。

この矛盾、この分裂——。人々よ、萬千子を責むるなかれ。これが人間の生の命の姿なのだ。まして、萬千子のやうな數奇な運命に置かれた、しかもあまりに過剰な情感を與へられた女性としては。この矛盾とこの分裂との裡に彼女の生きて闘さねばならぬ煉獄があつたのだ。

その上、そこにはまた生活の問題があつた。彼女は、日々の糧のために働かなければならなかつた。未決監から出て來た千尋は、いくらか健康を害してゐたし、その千尋のためにも、萬千子は働かなければならなかつた。

啓三郎を思ふ悲にも、さう、いつまでも耽り浸つてはゐられなかつた。悲は、働いて食はねばならぬ者にとつては、許され難き一つの贅澤であつた。彼女は、悲しむ事さへ許されぬ境遇にゐた。啓三郎を思ふ悲も、しかして辰夫を思ふ苦も、心の底に葬つて、彼女は生活のために働かなければならなかつた。

涙に濡れた顏を紅粉に裝うて、華やかな灯影と、陽氣な音樂との中で、胡蝶のやうに舞ふ夜々が彼女に續いた。

三

萬千子の働きに出てゐる人形町の方のダンス・ホールには、二十人から三十人ぐらゐのダンサーがゐた。その中で、女王と呼ばれた宮田數枝は、どうしたのか、この頃ちつとも、その大柄な豐麗な姿を見せなかつた。數枝がゐなくなると、萬千子の存在が一層目立つて來た。二三十人のダンサー達の中で、萬千子はたしかに群鷄の一鶴だつた。

良家の令嬢などが、氣紛に踊りに來る事も時々あつたが、萬千子は、ともすると、さういふ手合と間違へられた。一枚幾錢の切符で、誰彼無しに相手を勤める職業的のダンサーとは思はれなかつた。それほど、彼女の美しさは打ちあがつて見えた。

だが、彼女は、たゞその打ちあがつた美しさゆゑにのみ目立つて見えるのではなかつた。その美しさに飽和された無限の憂愁——蒼ざめた頰の色と、ぢつと思に沈んだ眼付と、嘗て笑のためにほころびた事のない唇とで、彼女は人々の注意を牽いた。

思ふな、考へるな、たゞこの刹那を樂しめ！　といふやうなジャズの音の、その浮々とした狂躁なリズムにつれて、長い袂を、紅に亂して飜へしながら、うつとりとした陶醉的な眼付から絶えず相手に媚を投げ口紅の濃い唇から

は時々ひそやかなさゞめきを送りながら、胡蝶のやうに輕やかに、小鳥のやうに樂しげに舞ふダンサー達の中で、萬千子だけは、たゞ、義務的に相手の抱擁に身を委ねて、機械的に四肢を動かしてゐるに過ぎなかつた。

それにも拘らず、男達は彼女を求めて殺倒した。彼女を對象として、番毎に、男達の中に小競合が行はれた。

「私、少し休ませて頂きます。」

だが、彼女は、さういつて休憩の席から立たない事が多かつた。——事實、これは彼女の身體には、隨分骨の折れる勞働でもあつた。この頃、ひどく健康をそこねた彼女は、すぐに息切がしたり眼暈がしたりした。

勿論、それは、單なる肉體的の苦痛のみではなかつた。鉛のやうな憂愁は、いつも彼女の胸に重かつた。彼女がどうして、そのやうな輕やかな踊り手であり得たらう？

どうかすると、彼女は踊りながら、妙な幻影に捉はれる事があつた。相手の顏が、ふと、あの啓三郎の顏に見えて來るのである。洋行歸だといふ髮の毛の薄い四十男の顏が、詩人だといふ天鵞絨服の男の顏が——いや、彼女と踊るあらゆる男の顏が、みんな啓三郎の顏に見えて來るのである——。

「私、今夜はどうかしてるわ！」彼女は顏を兩手でおさへて休憩席の椅子に伏し沈んでしまふ事などが時々あつた。

「どうもあの女の樣子は尋常ぢやアないよ。いや、あの女はきつとすばらしいローマンスを持つてゐるんだよ。」

クラレットに咽喉をうるほしながら、さういふ彼女の樣子を見やつて、男達は、こんな風に囁くのだつた。

「憂愁夫人——とでもいふのかなあの女の笑つたのを僕は見た事がないよ。」

詩人風の男の言葉を引受けて、その友人らしいのがかういつた。

「本當だ。一度、あの女の笑つた顏を見たいな。背、支那の天子は、何とかいふ美人の笑顏を見たいために——。」

「なあに。」

いひかけた言葉を奪ひ取るやうにして、もう一人がいま〳〵しげにいつた。

「あいつ、氣取つてゐるんだよ。あんなお孃さん面をしてゐて、とても凄いんだつていふぜ。——あんな風をしてゐて、實は、非常な妖婦なんださうだぜ。」

「しかし、そんな風には見えないぢやアないか？　そんな噂は、僕も聞いたが、僕は信じないね。」

天鵞絨服の詩人が抗議した。

「甘いね、君は——。そんな風には見えないところが、すなはち妖婦の妖婦たるところぢやアないか？」

そんな風に囁きあつてゐる男達の背後に立つて、鋭い眼で、ぢつと萬千子の方を見やつてゐる一人の男があつた。

四

そこへ案内されて來て、ダンサーの群に一通素早い視線を投げ、その中から萬千子の姿をすくひあげた時、彼の顏には強い驚が動き、彼の眼は獲物を見つけた隼のそれのやうに輝いた。彼は、しかし、人々の背後に身を隱して、ぢつと、萬千子の一擧一動を打ちまもつてゐるだけで、自身踊の仲間に加はらうとはしなかつた。

だから、萬千子は、定刻が來て、歸支度をしてホールを出るまで、その男の存在には氣がつかなかつた。

「萬千子さん。」

その男が、背後からだしぬけに、彼女を呼びかけたのは、彼女がそこを出て電車の停留所の方へと十歩ばかり歩き出してからであつた。

さうして、歸途を擁して呼びかけたりする男は、萬千子にとつてちつとも珍しくはなかつた。この頃では、殆ど毎晩、そんな男にぶつゝかつた。どういふ態度で、さういふ男に對すべきかをも今はいくらか心得てゐる。だから、萬千子は、もう前のやうに當惑したり怯えたりしてばかりはゐなかつた。

が、その男が、あの吉浦助であつた事を知ると、萬千子は思はずぞッとした。瞬間あの城西ホテルの怖ろしい記憶

が蘇つた。――この男は、未だ自分の後をつけ廻してゐたのか！　何といふ執念深い男なのだ！

「又、見つけてしまひましたね。これで三度目ですよ。」

碁盤縞の鳥打の、横ッちよに曲つた庇の下から、鋭い眼を輝かしながら、吉浦はにや〳〵と笑つた。

萬千子は、默つてぢつと睨みかへした。

「は、は！　三度目の正直ッて、よく子供がいふぢやありませんか？　今度こそ、逃げようッたつて逃がしやしませんよ。」

吉浦は、つか〳〵と萬千子に身近にすゝみよりながらいつた。

「一體、私をどうなさらうつておつもり？」

萬千子は二三歩退つて身構へをしながら、きッとした調子でいつた。

「一晩つき合つて下さりやそれでいゝんです。――特別にどうのかうのといふんぢやない、外の多くの男並に僕を取扱つて呉れりやアそれでいゝんです。」

「仰有る事が分りません。失禮させていたゞきます。」

「まあ、待ちたまへ。」

吉浦は、いきなり手を伸ばして、萬千子の手を握つた。

「何をなさるのです。」

「は、は！　僕にだけ、何もさう虚勢を張つて令孃らしく振舞はなくてもいゝでせう？　なるほど一年前まではあなたも令孃だつたんでせうがね。」

吉浦は鼻先に嘲笑つて、

「あなたが柳子に義理立てゞもしてゐるんなら、それは馬鹿げてゐますよ。柳子はもうとッくに、新しい男をこしら

へてゐるんです。」

さういひながら、吉浦は片手をあげて、通りかゝつたタクシを呼び留めた。

「離して下さい。」

萬千子は、とられた手を強く振りもぎつて走り出さうとした。その肩を、吉浦の手がうしろから押へた。萬千子がよろ〳〵と倒れかゝつて、危ふく立ち直つた時、吉浦の方があべこべに五六歩ばかり突きのめされた。

「何をするのだ？」

といふ聲で氣がつくと、いつの間にか一人の男がそこに立つてゐた。――萬千子の眼には、その背丈の高い後姿だけが映つた。

「何をするつて、君こそ何をするのだ？」

そこの電柱で激しく肩を打たれ、反動的にまた二三歩前へ飛び出した吉浦は、白い齒を剝いて吼りかゝつた。

「君はこの人をどうしようといふのだ？」

「どうしようと僕の勝手だ。君の知つた事ぢやアないのだ。――餘、餘計なおせつかいをして後悔するな。」

「餘計なおせつかいぢやない。僕はこの人を保護する義務があるのだ。」

「君は一體誰なのだ？」

「君こそ、どういふ人間なのだ？」

五

「僕とその女との關係に、第三者から口出しの必要はないんだ。」

吉浦は肩をゆすり上げながらいつた。

「第三者だつて？――僕ア、この人の知合なのだ。友達なのだ。」

相手の男は、萬千子を背後にかばふやうにしていつた。

「（友達）や（知合）を、山ほど有つてゐる筈の、その女に、君だけが特別の權利を主張する理由はなささうだね。は、は！」

と、吉浦は嘲笑つて、

「君がその女の友達だつていふんなら、その女がどんな女かぐらゐ君だつて知つてゐるだらう？　まさかその女を、淑女だとも、王女樣だとも思つてゐるわけぢやないだらう？　つまらん騎士氣取なんか止し給へ。」

「僕は、この人に用があるのだ。――君が誰だか知らないが、この人の意志に反してこの人を引張つて行かうとするのは亂暴だらう？　暴力を用ひたりするのは止し給へ。」

「どつちが暴力だ？」

吉浦は邪惡な眼付で相手を睨んだが、蒼ざめた顏をひきゆがめるやうにして、

「どうせ、賣物買物だ！　君のポケットの中の金が僕のよりいくらかでも多いといふんなら、その女は今夜は君のものだよ。僕ア、この次の機會まで待つとしようよ。」

冷たい嘲笑を以てかういふと、くるりとあちらを向いてすた〳〵と歩いて行つた。

相手の男が――石田辰夫が、その男の背に、もう一睨くれてから振返ると、しかし、そこには萬千子はもうゐなかつた。小走に逃げてゆく萬千子の、二三間先の街角を曲らうとする後姿が、街燈の灯影に浮いてゐるのが、あたりの人通りのないだけに、まぎれるものもなく見てとられた。

辰夫は追ひかけた。

「萬千子さん！」

呼びかけられて、萬千子は、片袖を顏に押し當てたそのまゝの姿勢で、はツと立ち竦むやうにしたが、辰夫が更に二三歩追ひ迫つて、もう一度

「萬千子さん！」

と呼びかけると、又、彈かれたやうにして逃げ出した。

「萬千子さん！　どうして逃げるのです？」

辰夫は、萬千子の肩を後から手でおさへるやうにした。

「僕が、この間あなたのおうちを訪ねた事は、あなたも知つてゐるでせうね？」

萬千子がもう逃げようとせず、辰夫と肩を並べて、歩くでもなく歩かぬでもないといふやうなあしどりで歩き出した時、辰夫は喘ぐやうにかういつた。

「え、。」

と、萬千子はうなづいた。

「そのうちに、あの家にはあなたはゐなくなつた。あすこであなたがダンサーになつてゐるといふ話をつい、先刻聞き込んだので――それでやつて來たんですが、逢へて宜かつたです。」

だが、萬千子は矢張唖のやうに默つてゐた。もう顏から袂を離してゐた。正面を向いたまゝ並んで歩いてゐる辰夫の方は振向きもしなかつた。だから、辰夫には萬千子がどんな表情をしてゐるかまるきり分らなかつた。

「何よりも僕は、一年前の、あの時の事を、あなたに謝らなければならないのです。あの時、折角あなたが訪ねて來て下すつたのに、僕はあんな風にしてあなたを歸してしまひました。僕は實に馬鹿だつたのです。僕は心から、後悔してゐるんです。――ねえ、萬千子さん！　僕は心からあなたに謝ります。どうぞ、僕を許して下さい。僕が間違つてゐたんです。」

句々、肺腑を絞るといふ調子で辰夫はいひ續けた。が、萬千子は矢張默つてゐた、啞のやうに押默つてゐた。辰夫はいひ續けた。

「僕は間違つてゐたのです。僕は誤算してゐたのです。自分の心持を誤算してゐたのです。」

六

萬千子は、矢張押默つてゐた。辰夫は、一氣にすべてをいひつくさうとでもするやうに、せつかちな調子でつゞけた。

「僕は、自分の心持を誤算したのです。僕がどんなに深くあなたを愛してゐたか？　僕は、今になつてはつきりそれが分つたのです。勿論、僕は最初あなたに別れて、外國へ行つたりしてゐるうちにも、あなたの事は忘れた事はなかつたのです。忘れようと思ひながら、矢張忘れられなかつたのです。そのために、僕は非常に苦しんでゐたのです。ところがあの時小田原の停車場で偶然あなたに逢ひました。運命の惡戯としか思へなかつたあの偶然に、しかし、今思へば、深い意味がひそんでゐたのでした。あなたは、新婚旅行の途中から逃げて歸つたといつて、あのあくる日、僕の處に訪ねて來て呉れましたね。僕は正直のところ、何よりも先づ吃驚してしまつたのです！　實際それは確に少し突飛過ぎましたからね。一時の感激的な行爲なのだ、むしろ氣紛なのだ！　あなた自身の幸福のためにも——と思つて僕はあの時あなたを歸しました。折角訪ねて來て下すつたあなたを、一直線に僕のふところに飛び込んで來たあなたを、僕はとう〳〵歸してしまひました。冷靜でなきやいけない！　あなたの運命を狂はしちやいけない！　さう僕は思つてゐたのです。」

「そして——。」

と、この時萬千子は初めて口を開いた。靜かな冷やかな聲であつた。その聲で、萬千子が泣いてなどゐるのではない事が分つた。

「こんな世間見ずのブルジョア娘は所詮相手にならないとお思ひになつたのでせう？」

「いや、さういふわけぢやないのです。決してさういふわけぢや——。」

「正直におつしやつて下さいませ。お隱しにならなくてもよろしうございます。もう、何もかも過ぎ去つてしまつた事なのですから。」

萬千子は、眞直に前を向いたまゝで答へた。その聲には、嘲るやうな調子が籠つてゐた。

「——正直にいひますよ。僕は一つの觀念にとらはれてゐたのです。——僕は、自己革命を企てゝゐたのです。最初僕が、あなたから去つたのも、そのためだつたのです。ですが、これは、見事に失敗したのです。今では、僕は後悔してゐるのです。」

「私も後悔してゐるのでございます。」

と萬千子は相變らず冷然とした調子でいつた。

「——あれは、本當に、つまらない一時の氣紛だつたのでございます。あなたのお考へになつた通りですわ。」

「ですが、あなたは、僕が想像したやうに、嫁入先のお家にはお歸りにならなかつたのです。僕は、あの後間もなくそれを知つたのです。僕は自分の心持を誤算したばかりぢやない、あなたに對しても誤算してゐたのです。」

「誤算とおつしやれば、私だつてさうですわ。私も矢張り、人の心の深さといふものが、本當によく分つてゐなかつたのでございます。」

萬千子は、啓三郎の事を思ひ浮べながらさういつたのであつた。——が、辰夫には勿論、萬千子の心の消息はよく分つてゐなかつた。彼は、自分の問題にのみ向つて突き進んだ。

「僕は、心から後悔してゐるのです。なぜ、あの時、僕は胸をひろげてあなたを迎へ取らなかつたんだらう——僕は實に馬鹿だつたのです。」

「でも、あの時に、さうするわけにはいかない、もう一つ外の理由がおありになつたのでございませう？」

「外の理由？」

「美しい娘さんが、あの時一緒にゐらしつたんですわね。」

萬千子の言葉は、發止と辰夫の心を擊つた。

「僕は、間違へたのです。——過失だつたんです。」

辰夫は呻くやうにいつた。

「矢張り誤算でしたのね？」

萬千子の聲には冷やかな笑が含まれてゐた。

「でも、あの娘さん、本當にいゝ方ですわ。私、この間、お目にかゝつて、一寸お話したゞけですつかり好きになつてしまひましたわ。」

七

「あの娘は——。」

と、辰夫は、苦しくどもるやうにして、

「いや、あの娘も、本當に氣の毒です。あの娘にも濟まないと思つてゐます。」

美代子の事は思ひ出すさへ苦痛だつた。美代子を愛した——いや、愛さうとした自分の過失のために、いかに多くの犧牲が拂はれねばならなかつたか？　庄作の死、猪之助の入獄。——それ等の事を思ふと、辰夫は、生きて天日を

仰ぐに堪へぬ思がするのであつた。

「本當に、あの方はお氣の毒ですわ。でも、あんないゝ方を、どうしていつまでも愛しておあげにならなかつたのでございますの？」

「どうぞ、そんな風にいはないで下さい。そんな皮肉な事をいはないで下さい。」

「あら、皮肉ぢやございませんわ。」

しばらくの間無言が續いた。

「ちよつと、どこかで休みませう。歩きながらぢや、話がしにくいですから。」

「でも、もう遲うございますから——。」

萬千子は併し拒めなかつた。偶然眼についた小さな喫茶店——幸、外に客もない狹いホールの片隅に、二人は相對して掛けた。

明るい灯の下で、眞面に向ひ合ふと、萬千子は急に胸が迫つて來た。すこしでも氣をゆるめると、わッと泣き出してしまひさうに思はれた。

泣いちやいけない！　彼女は一生懸命に氣を張つた。

——萬千子の蒼ざめた顏が假面のやうに見えた。

「私——。」

と、萬千子は、その顏を兩手で抑へるやうにしていつた。

「もう、どんな事があつても、あなたにはお目にかゝらないつもりでをりましたの。どうして私、あなたにお目にかかつてしまつたのでせう？」

——それは萬千子の眞實の氣持でもあり、同時に、まるでその反對の氣持でもあつた。決して會ふまい——さう思

ふ心の一方では、どんなに強く、かうして會ふ日を待ち望んでゐた事だらう？

「いや、僕の罪です。みんな僕の罪です。本當に、今更あなたにこんな事をいへた義理ぢやアないんです。ですが、僕はあれから一年の間、ずつと後悔しつゞけてゐたのです。」

「一年――丁度一年になりますわね。一年間には、隨分いろ〳〵の事がございました。」

萬千子は嘆くやうにいつた。

「一年間のすべてを抹殺して――一年間をもとの空白に戻して、どうぞ、萬千子さん、もう一度僕のところへ來て下さい。僕は心から、あなたにお願ひするのです。」

「もとの空白に？　まあ、そんな事が出來るでせうか？」

萬千子は、低く呟くやうにいつた。何といふ勝手な事を？　萬千子は、思ふさま、その我儘を罵つてやりたかつた。が、萬千子にはそれが出來なかつた。――ばかりか、やゝもすれば、心弱く泣けさうになつて來た。たゞ、その聲音の一片を聞いたばかりでも、身内の血が嵐の海のやうに鳴り騒ぐ初戀人の情感が、過去のさま〴〵の記憶を率ゐて、このひと時に彼女の方寸を攻めたてるのであつた。

「一年間はいはゞ惡夢のやうなものでした。いや、一場の惡夢としてすべてを葬つて、新しくやり直して下さい。ね、萬千子さん。」

「でも、私はもう一年前の私ではございません。」

「それはさうでせう。しかし、あなたが、どんな人になつてゐようとも、僕は構はないんです。そんな事は問題にしないんです。」

「どんな人に？」

と、萬千子は辰夫の顏に反問の眼付を投げたが、

「ほ、ほ！　私を、あなたは、どんな女になつてゐるのだとお思ひになつて？――私が、どんなに墮落女になつてゐても、あなたは構はないとおつしやるの？」

冷たい笑が萬千子の口許に浮んだ。

八

「勿論の事です！　あなたが、今どんな境遇にゐられようとも、それについてあなたを非難したりすることがどうして僕に出來るでせう？」

辰夫は、萬千子の樣子を、もう一度改めて見直すやうにした。

――この人は、私を、もうすつかり墮落し切つてゐると思つてゐるのだわ、と萬千子は心に呟いた。そして、心外な氣がした。しかし萬千子は、命にも換へて守り續けた自分の純潔について、辰夫に辯解する氣にはなれなかつた。

「ほ、ほ！」

と、萬千子は冷たく笑つて、

「私、そんなに墮落したやうに見えますか知ら？」

「いや、決してさういふわけぢやアないのですが――。」

辰夫があわてゝ打ち消さうとするのを、萬千子は押しかぶせるやうに、

「いゝえ。私、本當にもう仕方がない女ですの。私、もう一年前の私とはすつかり違つてしまひました。」

「あなたがどんな風になつてしまつたらうと、すべては僕の責任です。それに、僕だつて――僕だつて、そのためにあなたを責め得る資格はないのです。」

「つまりお互ッこだとおつしやるのね？　それで帳消にしてやらうとおつしやるのね？　ありがたう！」

萬千子は再び冷たく笑つて、

「私が、あんなところで働いてゐる事がよくお分りになつてね。」

「それは、すぐに分つたのですよ。」

「隨分意外にお思ひになつたでせう？」

「正直のところ、そこまで身を落してゐらつしやらうとは思ひがけなかつたのです。」

「身を落して――とおつしやるの？　でも、外に生方がなけりや仕方がないぢやございませんか？　何かして働かなきや食べられませんもの。私も今ではプロレタリアよ。」

「さうです。さうです！」

辰夫はうなづいた。

「私もこの點ではあなたに愛して頂ける資格が出來たのかも知れませんわね。」

萬千子は、きッと、辰夫の顏を見据ゑるやうにした。

「いや、そんな事はどうでもいゝのです。萬千子さん、あの時の僕は間違つてゐたのです。僕は、後悔したのです。――僕は、あなたなしには生てゐられない人間だつたのです。僕には何よりもあなたが必要だつたのです。主義も運動も、その上の事です。いや、僕はあなたのためには、そんなものは皆捨てゝしまつてもいゝと思つてゐるのです。――いや、もう、皆捨てゝしまつてゐるのです。」

「ありがたうございます。――でも、私、もうあなたに愛してはいたゞけない人間になつてしまひました。」

「なぜですか？」

萬千子は無言のまゝ、悲しげな眼付で辰夫の顏を見上げた。

「……。」

「なぜですか？　萬千子さん。」

「……。」

「あなたは矢張り、僕を怒つてゐるのですか？　僕をゆるしてはくれないのですか？」

辰夫は、燃えるやうな眼付で、萬千子を凝視た。その情熱的な眸が、萬千子に、過去の、さまゞの場合の辰夫を思ひ出させた。萬千子は、その胸に身を投げつけて泣きたい衝動から、辛うじて自らさゝへた。

「ねえ、萬千子さん。今更、こんな事をいふのはむしろ恥知らずです。しかし、僕は心から後悔してゐるのです。僕がわるかつたのです。どうぞ、僕をゆるして下さい。もう一度、僕のところへ戻つて下さい。僕と一緒に、すべての事をもう一度やり直して下さい。」

辰夫の眼にも、涙が溜つてゐた。

「いゝえ。いゝえ。」

と、萬千子は首を振りながら弱々しくいつた。

「いゝえ、駄目ですわ。私、もう駄目ですわ。」

九

――辰夫は、萬千子の宿の前まで萬千子を送つて來た。もし、萬千子が一人の弟と一緒にすんでゐると話さなかつたら、辰夫は萬千子の拒を犯して、そこへあがつて來て、夜をこめて萬千子を說き、萬千子に訴へたかも知れなかつた。

「ぢや、又、明日來ます。かうして一度會つた以上、もう逃げたりなんかしないで下さい。」

門口で別れる時辰夫はかういつた。

萬千子は――今度は、或しもたやの二階の二間を借りてゐるのだつたが、逃げるやうにその二階へ走りあがつた。外出してまだ歸らないと見えて、千尋はゐなかつた。

萬千子は、机の前にべたりと坐つた。そして、大きな溜息を一つした。

ぢつと空間の一點をみつめるやうにしてゐる萬千子の眼には、次第に涙が溜つて來た。それがまつげをぬらし、まぶたを溢れてやがて二筋三筋と頰に流れはじめた。辰夫の前では冷たい微笑にかくして强情に持ちこたへて來た悲が、はげしく胸底から衝きあげて來た。

彼女は、机の上に面を伏せた。肩が波打ち、嗚咽の聲がつゞいた。

しばらくして、彼女が顏をあげた時、彼女の眼はもう乾いてゐた。

(――私は、何て意氣地のない女なんだらう！)

彼女はかう心の中でいつた。

もし、逢つたらいつてやらう！　思ふさまいつてやらう！　とかねてから思つてゐた恨の言葉、憤の言葉のその一語をさへいへなかつたのだ。

(あの時、私はあなたにとつて無用な者でした。今、あなたは私にとつて無用な人です。あの時、あなたが私をお拒みになりましたが、今度は私の番です！　私があなたを拒む番です！　どうぞ、もう何もおつしやらないで下さい。再び私を求めないで下さい。私は捨てられた女です！　捨てた女に今更何をおつしやるのです。)

なぜかういつて、拒絶する事が出來なかつたのだ？　なぜ、それが出來ないのだ？　もし、さうして斷然拒絶したら、それこそ痛快な復讐といふものではないか？

自分のためにばかりではない。死んだ啓三郎に對しても――さうだ！　あの啓三郎の名において、斷然、辰夫は拒絶すべきではないか？

おう、あの人！　あの可哀さうな人！　自分の心は、みんな、もうあの人にやつてしまつた筈なのに――。

さう萬千子は思ふのだつた。が、悲しくも分裂した彼女の心だつた。――彼女は、あの辰夫の思ひ迫つた眼付と、情熱的な言葉とを、もう一度そこに描き浮べ、思ひ浮べて見ずにはゐられなかつた。

そして、滿潮の海のやうに、辰夫に向つて漲り寄せてゆく、心の動をどうする事も出來ない氣がするのであつた。

萬千子は、この分裂と矛盾とをぢつと抱きしめるやうにして、火の氣もない部屋の中にぢつと坐りつゞけてゐた。

階下で、ぽいんとひとつ時計の音がした。もう一時だつた。

千尋は未だ歸らない。どうしたのであらう？

萬千子はそれが不安になつた。で、隣の千尋の部屋へはひつて見た。

ふと、千尋の机の上に、白く置かれてある一通の手紙が眼にとまつた。

(姉上様)

と、表に書いてあつた。

萬千子は、はッとした。ふるへる指先で封を切つた。

文句は簡單であつた。

――僕が姉さんと一緒にゐては姉さんに迷惑をかけるばかりだ。僕は、しばらくの間、姉さんと別れてゐたい。大阪へ行くといふ仲間の者に誘はれて、僕もこれから大阪へ行く。

そんな意味の事が書かれてあつた。

出發

一

東京驛の一二等待合室の入口のところに突つ立つて、石田辰夫は、次第に募り來る不安の裡に、そこに現はれて來る筈の人を、待ち焦立つてゐた。

出發の時間までには、もう十分ばかりしか餘されてゐない。辰夫は、二十分以上もかうして待つてゐるのだつた。

萬千子に逢つてから、それから二三日、辰夫は遮二無二と說き立てた。そして、漸く今度の大阪行を承諾させたのだつた。——あの品川の方の爭議を中途で逃げ出してからは、辰夫ももうおめ〳〵と東京にゐられる身ではなかつた。大阪は、彼の鄕里にも近かつた。郊外の方へでも、小さい巢を構へ、そこで萬千子と二人の、靜かな愛の生活を營まうと彼は考へたのであつた。

千尋も大阪へ行つたのだ。千尋の事も心もとなかつた。大阪と聞くと、萬千子の心も動いた。

ひたむきに押し迫る辰夫の情熱に、萬千子は遂に打ち克つ事が出來なかつた。萬千子も、辰夫と共に大阪へ行く事に決心した。

辰夫と共に大阪へ行く——それは、いふまでもなく、再び辰夫の愛に抱かれる事を意味してゐた。大阪行に與へた承諾は、辰夫のあらゆる求への承諾だつた。

——だが、こんな事になつて、これで果していゝものだらうか？

いざといふ時になると、再び彼女は躊躇せざるを得なかつた。

彼女は、東京驛に向つてタクシを走らせながら、幾度、途中から引返さうとしたか知れなかつた。

「やあ！」

と、辰夫は、よろめくやうな足どりで、そこへはひつて來た萬千子を見ると、急に晴々と明るくなつていつた。

「遲かつたですね。隨分待つたですよ。」

「さう？　そんなに遲くなりまして？」

「もう、切符は買つてあるのです。——あまり、遲いので、氣が變つたのぢやアないかと僕は心配したのですよ。」

辰夫は笑ひながらいつた。

「えゝ。私、どうしようかと思ひましたの。何だか、氣が向かなくなつてしまつて——。」

萬千子は、後半を獨語めく調子でいつた。

「そんな事をいつて——ぢや、すッぽかさうと思つたんですか？」

「えゝ。」

と、萬千子は上眼で笑つた。

「この場になつて、すッぽかされでもしたらそれこそみじめで目も當てられない。——いや、正直のところ僕もちよいと不安だつたのですよ。」

辰夫は、椅子の上に置かれた大型のスウト・ケースに手をかけながら苦笑した。

「さう？　ぢや、さうしてあげれば宜かつたわね。」

「あぶない。あぶない。」

辰夫は苦笑しつゞけながら、

「兎に角、早く汽車に乘り込んでしまはなきや——。」

大跨ですた〳〵と改札口の方へ歩き出す辰夫の後について、萬千子も歩き出した。

その辰夫の、がつしりとした、幅廣な肩へ眼をやりながら、萬千子は、所詮自分はこの人によつて生きる外ない人間だと思つた。さうだ！　もう、仕方がないのだ。この人の後を、何處までゞもついて行く外はないのだ。

そろ〳〵と續く乘客達の中にまじつて、二人はプラットフォームの方へ歩いて行つた。

二等室は割にすいてゐた。

「寢臺はとらなかつたです。今夜は、この汽車の中で、ゆつくりとあなたと語りあかさうと思つてね。」

辰夫は座席に落着くと斯ういつた。

「さあ、これで愈〳〵僕等の運命も正しい軌道へ返つたといふものですよ。」

二

だが、萬千子は、對角線に向ひあつた向側の席に、こちらへは後姿を見せて窓越しに見送の人達と挨拶してゐる若い二人の姿に、その眼を吸ひ寄せられてゐた。

若い二人――それが、今、婚禮の宴から送られて來たばかりの人であることは、一目見たばかりで知れた。プラットフォームに立つた十人ばかりの見送の人達は、窓際に重なり合つて、笑ひさゞめいてゐた。

「お大事に――。」

「氣をつけてね。」

「羨ましいなあ。僕も、もう一度やつて見たいよ。」

「は、は！　一生に一度の旅行だ。ゆつくりして來たまへ。思ひきつて別府まで行くんだな。」

見送の人達は、口々にいつた。

きりたての背廣を着た男の方は、笑ひながら、應酬してゐたが、濃いコバルト地に、大きく菊の模樣を置いた二枚

重を着た女の方は、その重さうな高島田を、默つて恥かしさうに動かしてゐた。

やがて汽車が動き出した。又、ひとしきりどよめきが起り、どよめきの中から、

「――萬歲！」

と叫ぶ聲もした。

汽車がプラットフォームを出外れてしまふと、二人は、ほッとしたらしい樣子で、こちら向に坐り直した。新郎の方も、二十三四ぐらゐの若さだつたが、新婦は漸く、十七八の、まだ子供ッぽい初々しさを、身の置きどころもないといふやうなはじらひの中に見せてゐた。

二人は、互に互を憚るやうに、しばらくの間默り合つてゐたが、やがて、男が、うつむけた女の顏を覗き込みながら、何か二語三語さゝやいた。女は、一寸、男の顏に眼をあげながら、口のうちで小さく答へると、見る〳〵ぱッと紅くなつた。

――さうした二人の樣子を、萬千子は、我を忘れたやうにして、打ちまもつてゐるのであつた。

當然、萬千子は、一年前の自分をそこに回想せざるを得なかつた。一年前、自分もまた、あの啓三郎と共に、かうして新婚の旅にのぼつたのではなかつたか？

萬千子は、偶然、さうした新婚者と乘り合せたといふことのうちに、自分に一年前の回想を强ひるための、何者かの意思を見るやうな氣がした。この偶然が、單なる偶然ではないやうな氣がした。

「新婚旅行なんですね？」

と、辰夫も、その方に眼をやりながら、小聲で萬千子に囁いた。

「えゝ。」

「――考へ込んでゐるんですね。あなたはきつとあの時の事を思ひ出したんでせう？」

辰夫は微笑しながらいつた。この辰夫の言葉で、たゞれうづく心の肌を、無遠慮に引つこすられたやうな氣が萬千子はした。萬千子は何か腹立たしかつた。

だが、辰夫は、萬千子のそんな氣持にはちよつとも氣づかないらしく、

「もう一度、僕とやり直して下さるんですね。ね、僕等の旅行も、やはり新婚旅行なんですよ。」

「まあ！」

萬千子は否定的な間投詞をはさんだ。

「は、は！　さうぢやないですか？」

と、辰夫は微笑しつゞけながらいつた。

「もう一度、何もかもやり直しだ！　新婚旅行のやり直し――さういふ事にしてもらふことは出來ないんですか？」

「そんな事、出來ないでせう？」

萬千子は、苦ッぽく笑つた。

「出來ても、出來なくても――僕は、そのつもりなんです。少なくとも僕だけはね。僕は今、非常に幸福なんですよ。あの人たちと――。」

と、いひかけて、辰夫は、斜向の席に眼をやつて、

「あの人たちと同じやうに僕は幸福ですよ。」

「さう？」

萬千子は辰夫を見上げていつた。

「あなたは、本當に、幸福だとお思ひになつて？」

三

「僕は今、かうしてあなたと一緒にゐる。あなたと一緒にゐるといふ事だけで、僕は十分幸福なのです。」

と、辰夫は情熱的な調子になつて、

「僕はもう幾度もあなたにいひましたね。僕は、間違つてゐたのです。思想のため、主義のためには戀愛なんか何でもないものだと僕は考へてゐたのです。戀とか愛とかいふものは、無視されていゝ。無視し得ないまでも、さういふ感情は、ほかのもつと大きな感情に從屬させるべきものだと思つてゐたのです。しかし、それは間違つてゐた。間違つてゐた事がしみ〴〵と分つたのです。今のところ、僕にとつては、あなたの外に生活の意義もなければ情熱の對象もないのですよ。あちらへ行つたら、當分、人からも世間からも隱れて靜かな郊外の方で靜かにくらしませう。小さな庭に花でも植ゑたりしてね。さうして暮らして行くぐらゐのものは、親父の遺産として未だ殘つてゐるのですからね。」

まあ、この人は自分だけの勝手な事ばかりいつてゐるわ！

辰夫の言葉を聞きながら、萬千子はさう思つた。

――萬千子は、かうして辰夫と一緒に出掛けて來た事を、心の底で悔い初めてゐた。新しい生活が初まるのだと辰夫はいつてゐる。もう一度やり直すのだと辰夫はいつてゐる。だが、そんな事が出來るであらうか？

新しい生活？

やり直し？

いゝえ！　と、萬千子は强く頭を振つて見ずにはゐられなかつた。

それならば、何故、うか〳〵とかうして出かけて來たのか？

辰夫はしきりに話しつゞけた。

辰夫は、萬千子が、まだ女學生で、辰夫の妹の志津子と仲好しで志津子と二人で、辰夫の書齋を訪づれた頃の事へ話を持つて行つたりした。

「志津子は――あれは、利口な奴でしたよ。少し、ませてもゐたが、實に敏感な、油斷のならない奴だつた。まだ、僕自身氣がつかないでゐた僕の心の祕密を、いつの間にかちやアんと見拔いてゐた。兄さんは臆病だ。兄さんがいへないんなら、私がいつてあげませう――さういつて僕を面喰はせたものだつた。は、は！」

「本當に志津子さんはいゝ方でしたわ。あの時分は、本當に幸福でしたわ。人間に幸福といふものがあるのでしたら、あの時分の事だつたと私思ひますわ。」

「だから、もう一度、あの時分の二人になるのですよ。――僕は、かうしてゐると、すつかり、あの時分の氣持になつて來るのです。あれから、もう三四年經ちますが、その間の事は夢のやうに消えてなくなつてしまふのです。悪い夢から、もう一度本當の自分に覺めたやうな氣がするのです。」

「悪い夢――私には、この生活といふものがみんな、悪い夢のやうな氣がするんですけれど。」

萬千子は嘆息するやうにいつた。

「――あなたは疲れてゐるのですよ。」

と、辰夫は、力なく伏し沈む萬千子の樣子を愛撫をこめて見やりながら、

「あなたはひどく疲れてゐるのです。あなたは、靜かに休息しなければいけませんよ。あつちへ行つたら、當分、出來るだけ靜かにくらしませう。疲れたといへば、僕もかなり疲れてゐるのです。」

辰夫は、さういつて、膝の上に置かれた萬千子の手を、そッと執りあげた。

萬千子の手は、氷のやうに冷たかつた。

冷たく更けて行く初冬の夜だつた。九時半に東京驛を出た汽車は、明るい月影を車窓に受けて走りつゝあつた。

斜向の座席の、新婚旅行の二人は、頰と頰をすりよせるやうにして、何かひそ〳〵と囁きあつてゐた。

萬千子の心は、ともすれば、その二人の方に牽かれて行つた。

四

その新婚の二人の姿を見ると、萬千子は、又しても、一年前、丁度そのやうにして蜜月の旅に上つた自分と啓三郎とを、そこに描いて見ずにはゐられなかつた。一年前の自分と啓三郎とを、そのまゝ、そつくりと見るやうな氣がした。

二人は、いかにも幸福さうだつた。幸福さうな二人を見ると、一年前の、自分たち二人も、同じやうに大變幸福であつたやうに思ひ返される。

一年前の自分たち二人と、今の自分たち二人と――。

自分の傍に坐り、自分に寄り添うてゐるその人が、辰夫ではなくて、啓三郎であるやうな、そんな不思議な錯覺がともすれば萬千子の心を捉へた。

辰夫は、しきりに語り續けた。彼は、新しい望と喜とに滿ち溢れてゐるといふ風に語り續けた。いや、むしろ、さうしてしきりに語り續ける事によつて、望と喜とを、强ひてかき立て、煽り立てようとでもするやうに――。

それ等の辰夫の言葉が、萬千子に對して全く效果がないといふのではなかつた。辰夫の言葉は、「嬰萬千子を、あの樂しい初戀の思ひ出へと誘つて行つた。だが、その思ひ出が、そこにかもし出さうとする陶醉は、すぐに外の一つの想念によつてかき亂されてしまつた。――啓三郎の悲しげな眼が、彼女の心をのぞき込んでゐた。

さうした萬千子の樣子が、やがて辰夫に語る事を止めさせ、辰夫の眼を暗く瞪らせた。

「萬千子さん。」
「え。」
「どうかしましたか？」
「いゝえ。」
「どうかしたんぢやないんですか？」
「いゝえ。」
と、もう一度答へながら、萬千子はふと、一年前の汽車の中で、丁度、こんな風に、啓三郎が自分に訊いた事を思ひ出した。
「何だか、ひどく顏色が悪いですね。」
「いゝえ。何でもございませんの。」
といひながら、萬千子は辰夫が執らうとした手を靜かに引いた。
——この人は矢張怒つてゐるのだ。この人は、どうしても打ち解けてくれない——。
辰夫は嘆息した。かうして一緒に大阪へ行く事を承知し、かうして一緒に汽車に乘りながらも、まだ一つの接吻をさへ許さうとしない萬千子であつた。
汽車が止まつた。
何かしきりに囁き合つてゐた新婚の二人は、顏をあげて、一緒にちよつと窓の方を振返つて見た。
「何處？」
花嫁が小聲で訊いた。
「横濱。」

「あら、まだ横濱？」
「だつて、まだ三十分しやたちませんよ。」
と、男の方が笑ひながら答へた。
「國府津までは、もう一時間半ありますよ。」
「おそくなりますわね？」
「十一時ちよつと過ぎになるけど、でも、宿は直ぐだし、宿屋の者が停車場まで迎へに來てゐるからね。」
新婚の一夜を、國府津の旅館で過ごす豫定なのであらう？　男がかういふと、女の方もうなづいた。
二三分停車して、やがて發車しようとする間際に、ドアを明けてそこへはひつて來た二人の男があつた。一人は、色のさめた、厚ぼつたい外套を着て、筒形の羅紗帽をかぶつた、大きな男だつた。一人は同じやうな套外に、帽子は、中折のくしやくしやになつたのをかぶり、ロイド眼鏡をかけてゐた。この方は、小柄で、精悍な顏付をしてゐた。
二人は、つか〳〵と辰夫の前に進み寄つた。辰夫は氣がつかなかつたが、窓の外から、辰夫の姿をみつけ、辰夫と會ふためにさうして飛び込んで來た二人なのであつた。

裏切者

一

つか〳〵と辰夫の前に進み寄つた二人の男のうち、背丈の高い方が先づ、

「おい、石田さん。」

と、呼びかけた。語氣は怒を含んで荒かつた。きッと一睨した眼は、爛々と怒に燃え、怒の中に嘲が動いてゐた。

「や！」

呼びかけられるまで、氣がつかずにゐた辰夫は、驚いてその壯漢の顏を見上げたが、それが何人であるかを見とめると、狼狽を隱す事が出來なかつた。

「どこへ行くんだね？」

詰問的な鋭い聲が、その狼狽の上に浴びせかけられた。

「大阪へ行くのだ。」

辰夫は答へた。

「さうか？　僕等も大阪へ行くのだ。」

壯漢はいつた。彼は、牛島といつて、無産××黨に屬する勞働者あがりの鬪士で、今度の品川の工場の爭議でも、大川などのやうに表面には立たなかつたが、蔭では隨分働いてゐた。爭議は、會社側の態度があくまでも强硬で、その上、猛烈な切崩しが行はれたりして、遂に職工側の全敗にをはり、多くの馘首者を出した上、大川はじめ幾人かは、

官憲に拉致されて今鐵窓の下にあつた。牛島の下阪も、その善後策のためであつた。――牛島と、もう一人渡邊といふ若い方のと、前の汽車で東京を出て、横濱で一寸降りて、用事をすまして乘り込まうとする時、ふと、窓越しに、二等室にをさまつてゐる石田辰夫の姿を目にとめたのであつた。

「さうか？　君たちも大阪に行くのか？」

辰夫は、虛勢を張るやうにしていつた。

「この汽車に君が乘つてゐようとは思はなかつたよ。石田さん。どこのお孃さんだか、奥さんだか知らないが――。」

と、牛島は、萬千子の方へきらりと眼を光らせて、

「女を連れて、二等室にをさまつて、結構な御身分だな。――いや、羨ましい御身分だよ。」

「仲間だと思へば腹が立つがね。牛島さん！　こいつがスパイだつてえ噂は矢張り本當らしいんだ。しこたまもらつて切崩しの手先になつたり――兎に角、この男は、會社の方とも、警察の方とも、始終内通してゐやがつたんだ。」

辰夫の前の座蒲團に腰をおろした渡邊は、憎々しげに辰夫の顏を睨みつけながらいつた。

「何を出鱈目をいふのだ？　失敬な！」

辰夫も、憤然としてかういはざるを得なかつた。

「出鱈目だつて？」

渡邊も肩をゆすりあげて、

「何が出鱈目だ？　君が一々の行動で、それを證據立てゝゐるぢやアないか？――おれ達の爭議の苦境の眞最中に姿をくらまして、一體何をしてゐたんだ。大川さんも、齒がみをして口惜しがつてゐたぞ。おれ達は、見つけ次第、うんと毆りつけてやらうと申し合せてゐたんだ。」

若い、血の氣の多い渡邊は、實際、毆りつけもしかねない剣幕でいつた。

「は、は！　こんなところで、君が一人でおこつたところで、仕方がないよ。腸の腐つた人間は、毆つたつて蹴飛ばしたつてどうもなるもんぢやねえんだ。」

と、牛島は、バットの煙を吐きながら先輩らしい落着きで、いきまく渡邊をなだめはしたが、この許し難い裏切者に對する憤は、彼にも激しく燃えてゐた。

「石田さん。」

牛島は、きら〳〵と底深くきらめく眼で、辰夫と、萬千子とを、無遠慮に、代る〴〵凝視てゐたが、やがて、かう呼びかけて、

「この御婦人は一體何だね？」

思ひきつて無禮な問ひ方だつた。

「そんな事を、君に答へる必要はなさゝうだがね。」

辰夫は、着ざめながらいつた。

二

「妙な噂を聞いてゐるから、それで訊いて見たのだ。君は、あの會社の重役の小野寺の息子と、大鞘當をやつたんだつてな？　それで、女をこつちの手に入れる代りに、交換條件として、君が爭議から足を拔き、その上切崩しのお手傳までしたつてえのは、本當なんか？」

「馬鹿な事をいひ給へ。」

「女一匹を餌に飼はれて、尻尾を振つて資本家の犬になつたんだな。」

と、若い方の渡邊は、唇を突き反らして、

「なさけねえ奴だ！　それで、これがその女なのか？」

萬千子と辰夫とを見較べるやうにしたその眼には、極度の憎惡と侮蔑とが籠つてゐた。

——どこをどう間違つて、そんな風聞が立つたのか？　辰夫は、むしろ啞然とするのだつたが、しかし、眼の前にひたと迫るその憎惡の眼侮蔑の眼を、斷乎としてはねかへすことが、彼には出來なかつた。

「誤解だ。つまらん誤解だ。」

かれは苦笑と共に繰返しながら、罪ある者の如く頭を下げた。

「いや、君の艶福は羨ましいよ。聞けば、小野寺の息子は、おやぢにくどかれて、君に女を讓つたはいゝが、そのためにすつかり悲觀して、可哀さうに、病氣になつて死んぢまつたてえ事ぢやアねえか？　小野寺も、君を買收するために、隨分高えものを拂つたわけさ。ところで、一人息子をなくしちや、いゝ加減まゐつた筈だが、畜生、却つて自棄に頑張りやあがつて、おかげで、おれ達は、めちや〳〵な慘敗だ。うまくやつたのは、つまり君だけだよ。は、は！」

牛島は、バットの煙の中で、嘲の笑を爆發させた。

「その女一匹のために、おれ達の仲間の幾十人と、その女房子供とが、今日の食物に困つてるんだ。牛島さん！」

と、渡邊は、牛島の方へきらめく眼を向けて、

「おれは、此奴を、どうしてもたゞぢやア措けねえ氣がする。」

さういつて拳を握りしめた。

「こんな奴、毆つたつて蹴つたつて、どうなるものでもねえ。俺だつて、此奴が、こんな風にして、いけしやあ〳〵としてゐるのを見ると、腸が煮えくり返るやうな氣がするが、今まで見そくなつてゐたのがこつちの落度だよ。」

牛島は、いきまく渡邊を抑しなだめるやうにしてから、しばらくぢつと辰夫をみつめてゐたが、

「おい、石田！」

と呼びかけて、

「これほどいはれても默つてゐるところを見ると、君も、いよ〳〵性根が腐つたんだな。――あいつだけは見そくなつたと、大川さんも口惜し涙をこぼしてゐた。君にも、ちつたア人間らしい心があるんなら――。」

いひかけた言葉を掻きさらふやうにして辰夫はいつた。

「僕が惡いんだ。――だが、買收されたの內通したのといふのは君の――君たちの誤解だ。そんな誤解だけはしないで呉れ。」

「誤解だつて？」

と、若い渡邊が再び拳を握りしめた。

「何が誤解だ？」

「誤解だ。誰がそんな噂を立てたのか知らないが、全く根もない事だ。」

根も無い事だ。しかし、全く根もない事といひきれるだらうか？　辰夫は、さういひながら、心のわな〳〵きを抑へる事が出來なかつた。

「なにをいつてゐるのだ。裏切者！」

渡邊は鬪牛のやうに身顫ひをし、拳を振りながら突つ立つた。――それを、牛島が抱き止めた。

「止せ！」

「とめないで呉れ！　牛島さん！　俺は、どうしても腹が癒えねえんだ。」

「止せといつたら！」

丁度、その時、汽車が次の停車場に停つた。

「さあ、俺達は俺達の室へ――三等室の方へ戻るんだ。渡邊！」

牛島は、いきり立つてゐる渡邊を、出口のドアの方へ押しやるやうにした。

三

「まあ、待つて下さい。僕ア、もう少しいひてえ事がある。」

「いくらいつたつて無駄だ。さあ、出るんだ。俺達は二等室のお客樣ぢやアねえんだ。」

牛島は、その若い仲間をドアから押し出さうとした。

「裏切者！　恥知らず！」

渡邊は拳を振り廻してそれとあらがひながら、火箭のやうな眼と、激しい罵聲とを、牛島の肩越に、辰夫の方へ投げつけた。

「もう、いゝ。もういゝッて事よ。」

牛島は無理矢理に渡邊をドアの外へ押し出した。渡邊は、押し出されながら、辰夫を眼がけてくわッと唾を吐いた。唾は、辰夫の片頰をかすめて、隣の、萬千子の膝の上に飛んだ。

「それでいゝ。それでいゝ。」

牛島は、その若い仲間と一緒に轉げ落ちるやうに、プラット・フオームへ降りて行つた。

この一場の出來事は、すつかり車中の人々を驚かしてしまつた。人々は、あちこち座席から及腰になつて、好奇的な、いくらかの危惧を含んだ眼を、辰夫達の方へ集めてゐた。あの新婚の二人――とりわけ、花嫁の方は、おど〳〵とした眼を小鳩のやうに瞠つてゐた。

それ等の視線に氣がつくと、辰夫は、今更のやうに激しい屈辱感が身內に漲るのを感じた。

「馬鹿者ども！」

彼は、てれかくしの苦笑と共に呟いてから、

「彼奴等、誤解してゐるんですよ。」

と、萬千子にいつた。

萬千子は面を伏せたまゝ、膝のところについた唾を、ハンケチでそつと拭いてゐた。その手が、わな〳〵と顫へてゐた。

「つまらない誤解をしてゐるんです。眞面目に相手になるのも馬鹿々々しいんで、なんにもいはずにゐましたがね。」

辰夫は、詫るやうにいつた。

が、萬千子は矢張押し默つてゐた。さつきから深く項を落して、彫像のやうに、身動ひとつしなかつた萬千子だつた。

「噂といふものは、實に妙なもんだ。彼奴等、本氣であんな風に思つてゐるんですかね。」

「でも、まるきり嘘といふのではございませんわ。」

「あの、小野寺の息子の、啓三郎君――と確かいひましたね。あの人が、死んだといふのは本當ですか？」

「本當でございます。」

萬千子は、初めて面を起した。そして、まともに辰夫の顏を見上げるやうにして、はつきりとかういつた。

「さうですか？　僕ァ、そんな事ちつとも知らなかつたのです。」

辰夫は、嘆息して、

「あの人は、矢張りあなたを愛してゐたんですね？」

萬千子は、辛さうな眼で、辰夫の顏を見上げた。

「さうですか？　死んだのですか？」

辰夫は、もう一度嘆息したが、

「いや、氣の毒な犧牲者だ。――だが、どんな事にしろ、犧牲といふものは必ず付き纏ふのです。一つの愛の完成のためには、その位の犧牲は已むを得ないのです。今は、もう、僕にはたつた一つの望と、たつた一つの生活の意義と、たつた一つの情熱が殘されてゐるきりです。このたつた一つの情熱の前には、あらゆるものを犧牲にしてもいゝと僕は思つてゐる。――彼奴等は、僕を裏切者だといつてゐる、恥知らずといやがつた！　裏切者でも恥知らずでも構はないです。僕、なんといはれてもびくともしませんよ。もう一度あなたがかうして僕のものになつてくれた――この幸福の前には、どんな屈辱だつて忍べない事はないと思ふんです。」

辰夫は、興奮していひ續けた。が、その興奮の中に、一種つけ元氣めいたものが混つてゐるのを、萬千子は聞きとらずにはゐられなかつた。

第三のジャンプ

一

この人は、一生懸命に、屈辱感に反抗してゐるのだ。——口に出して、それをいはずにはゐられないほどこの人は不安なのだ！

さう思ふと、萬千子は、辰夫がひどくみじめな氣の毒なものに思はれ、同時に何となくうとましい氣さへするのであつた。

「あなたにいやな思をさせて、ほんたうにすみませんでした。どうぞ、あんな手合が何をいはうと氣にかけないで下さい。」

萬千子の無言を、萬千子がすつかり腹を立てゝしまつたのだとでもとつたらしく、辰夫は再び詫るやうにいつた。

「あなたに、こんないやな思をさせて、みんな僕が悪いのです。」

「いゝえ。」

と、萬千子は靜かに頭を振つた。

「あなたを裏切者にしたのは、私なんぢやアございませんか？　濟まないのは私の方でございますわ。」

「いや、僕は、彼等から裏切者と呼ばれる事は平氣です。事實、僕は裏切者には違ひないのですから。——僕は、たゞ、あなたに對して長い間裏切者であつた事を悔いてゐるだけなんです。」

「いゝえ！　私こそ裏切者なのでございます。——私こそ——。」

と、萬千子は、ぢつと自分の胸の中を凝視るやうにしていつた。

「——私こそ、裏切者なのでございます。」

さうだ。萬千子は、あの若い男が、「裏切者！」と叫んだ時、それをたゞ辰夫に向つて叫ばれた言葉だとばかりは聞けなかつた。その言葉は、征矢のやうにふかく彼女の心臓に立つたのだつた。

「裏切者！」

自分もまたそれではなかつたか？

どこかゝら、ぢつと自分を凝視てゐる啓三郎の眼が、萬千子にはつきりとそれを感じさせるのであつた。

「裏切者！」

さういふ啓三郎の聲を、まざ〳〵と萬千子はその耳に聞いた。

「どうしてそんな事をいふのです。」

と、辰夫は、萬千子の底深い苦惱に蒼ざめた顏を覗き込むやうにして、

「どうして、あなたが裏切者なのです？」

「石田さん。」

萬千子は、彼女の手を執らうとした辰夫の手をふり拂ふやうにして、

「私、矢張り、あなたにとつて邪魔な人間ぢやなかつたのでせうか？」

「邪魔な人間？　どうしてそんな事をいふのです？」

「さうですわ。私がゐるばかりに、あなたは裏切者におなりになつたのです。私がゐない方がいゝのでございます。私は、あなたにとつて、邪魔な人間なのでございます。」

萬千子は、辰夫の眼の中を見入るやうにしていつた。

「あなたは、矢張り、あの人達のいつた事を氣にしてゐるんですね。——あなたは、僕が、彼奴等に、ひどく侮辱さ

れたとでも思つてゐらつしやるのでせう？　侮辱かも知れません、しかし、僕は平氣なんです。何とも思つちやゐないんです。あなたも、どうぞ氣にかけないで下さい。あなたもどうぞ、平氣になつてゐて下さい。」

辰夫は熱心に繰返した。しかし、折角の辰夫の言葉も、萬千子にとつてはひどく見當外れのものとしか思はれなかつた。

――この人には、私の氣持がよく分つてゐないのだ。

萬千子はさう思ひながら、悲しげに辰夫の顏を見やつた。

（私はもうあなたを愛する事が出來なくなつてゐるのでございます。かうしてあなたと出かけて來たのは、矢張り間違つてゐたのでございます。あなたは私を愛して下さるおつもりでも、私への愛のためにすべてを拋つて下さるおつもりでも、私はもうあなたの愛をお受けする事は出來なくなつてゐるのでございます。）

萬千子はいはうとしていへないこの言葉を、その悲しい眼でいはうとした。ぢつと辰夫の顏を凝視ながら――。

二

さうだ。もし、自分といふものがなかつたら、この人は、この人の進むべき道に眞直に進んで行けたかも知れないのだ。裏切者などにならないでよかつたのだ。自分といふ者は、この人にとつて、所詮有害無益な存在に過ぎないのだ。

この人にとつて――ばかりではない、この世の中にとつて、自分といふ者の存在が、何の意義があり、價値があるといふのだ？

この世の中全體のためにも、所詮、自分は有害無益な存在に過ぎないのではないか？

萬千子は、單身、世に立つて生きようと決心してからの過去一年間を、そこに思ひ返して見ずにはをられなかつた。

その一年間を、自分はいかに生き得たか？　あの「新しい明日」を望んで、新しい歩を起してからの一年間を、自分はいかに歩んで來たか？　その歩のたど〳〵しさを、萬千子は振返つて見ずにはゐられなかつた。足裏は傷つき、足跡には血がにじんでゐた。さうして脚力はもう盡きてゐた。「新しい明日」の望がどこにある？　そこにあるのは、ただ「空しい明日」に過ぎなかつた。

空しい明日！

「萬千子さん。」

と、その時辰夫が呼びかけた。

「もう考へるのは止めませう。考へたつて仕方がないのです。何も考へないで、どうぞ、僕にあなたの全部を委ねて下さい。あなたが僕にとつて無用の人間だなんて、どうぞ、そんなひどい皮肉をいつて、僕を苦しめないで下さい。」

「いゝえ。皮肉のつもりなんかでいつてゐるのぢやございません。」

萬千子は靜かにいつた。

「あなたが、そのつもりでおつしやるのでなくても、僕には皮肉としかきこえません。どうぞ、そんな事をいはないで下さい。なるほど、僕はあなたにとつて許し難い裏切者でせう。しかし、僕は今悔いてゐるのです。あなたといふ人が、僕にとつて、どんなに、なくてはならぬ人であるかといふ事を、僕は今はつきりと知つたのです。僕の過失は、愛といふものを輕視した事です。この過失によつて、僕は隨分手ひどく報いられたのです。僕は悔いてゐるのですよ。」

辰夫の言葉は切々として迫つた。

「でも、私もう、あなたに愛される資格がなさゝうでございますわ。」

「どうしてゞす？　又、そんな事を、どうしてあなたはいふのです？」

「今の私と、一年前の私とは違ふんですもの。」

「あなたはきつと――。」

と、辰夫は少し口籠つて、

「身體の事をいつてゐるのでせう？　そんな事なら、ちつとも氣になさる事はないのです。あなたほどの美しい魅力的な人が、さうして獨でこの世の中に生きて來た――よし、一年にもしろ、この世の中に生きて來たのです。その間に、どんなに多くの誘惑や危害が、あなたに降りかゝつて來たかは、想像に難くはないのです。あなたが、全く無事に、その誘惑や危害を切り拔けられなかつたとしても、そのために誰があなたを責め得るでせう？　まして僕が――！　あなたをそんな風にしたのは僕の責任なのです。」

「そんな風につて、私がどんな風になつてゐるとあなたはお思ひになりますの？」

萬千子は問ひ返した。この人は、私を、もう汚れきつた女かのやうに思つてゐるのだ。さう思ふと、萬千子は、腹立たしさの前にむしろ冷たい笑を感じざるを得なかつた。

「いや――。」

と、辰夫はやゝ狼狽したやうに、

「肉體的の事は問題ぢやアない――さう、僕はいつてゐるのですよ。」

「まあ！」

それから萬千子は、

「ほ、ほ！」

と笑つて、

「あなたは、大變寛大でゐらつしやいますのね。――でも、あなたは考へ違ひをしてゐらつしやいますわ。」

「考へ違ひを？」

と、辰夫は反問した。

「私は未だそんなに墮落した女にはなつてゐないつもりでございます。私がまだ處女を失つてゐない――と申上げたら、あなたは信じて下さらないかも知れませんが、小野寺との結婚さへ名ばかりのものだつたのでございます。」

「さうですか？――それは本當ですか？」

辰夫は、思はず驚の眼を上げて、萬千子の顏を見上げるやうにした。

「でも、それをお信じになるとならないとはあなたの御勝手でございますわ。」

萬千子は冷やかにいつた。

「ありがたう！　萬千子さん。」

と、辰夫は激しい感激に、しばらく、息詰らせられたといふやうにして、

「僕は、心からあなたに感謝するのですよ。」

――さうだ！　この人の純潔をどうして疑へよう？　この人の、清らかな眼の色を見たゞけでもそれは分るのだ。

辰夫はもう一度、黃昏の花のやうに白い萬千子の顏を見上げるやうにした。

「でも、それをあなたに感謝して頂いていゝかどうか私には分りません。」

萬千子の言葉は、相變らず冷やかだつた。

「どうして――どうしてそんな風にいふのです？」

辰夫は、悶々しくいつた。

三

萬千子は、默つてうなだれてゐた。

「いや、僕は、あなたに對して恥ずにはゐられない。實に面目ないのです。それほどのあなたの苦節に對しても――。」

いひ續けようとする辰夫の言葉を、萬千子は押へるやうにして、

「あら、そんな風におつしやつちやいけませんわ。私、何もあなたのために――あなたのために――。」

流石に萬千子は口籠つた。この、處女と純潔と――それは果して辰夫のためのものであつたか？　否！　さうではない。萬千子は、そこに、また、あの啓三郎の面影を――死を以て自分を愛してくれたあの啓三郎の面影を思ひ描かざるを得ないのであつた。

さうだ。自分はもうあの人の――啓三郎のものなのだ。

お互に語るべき言葉を見失つた、白け切つた沈默のうちに、萬千子は、聞くともなく車輪の音に聞き入りながら、この旅立を悔いてゐた。車輪の一回轉毎に深み行く悔いを感じてゐた。

どうして、私は、この人と一緒に出かけて來たのであらう？　この人と一緒にどこへ行かうといふのであらう？

やり直し――。

新しい生活――。

いゝえ！　いゝえ！　と、萬千子は强く頭を振つた。

辰夫は、何かいひかけようと、悶々しく焦せるのであつたが、とりつく端もないやうな萬千子の態度だつた。

汽車が停つた。國府津だつた。

少し前から身仕度をしてゐた新婚の二人は、汽車が停ると直ぐに立ち上がつた。

男は、大型のスウト・ケースを片手に持ち、片手に、ステッキを持つて座席を離れた。

「それ、お持ち致しますわ。」

女が、小聲にいひながら、ステッキの方へ手を差出した。

「なにいゝですよ。」

「あら、――お持ちいたしますわ。」

女は繰返した。

「さうですか？――ぢやア――。」

と、男はステッキを女に渡して、

「あんた、忘れものはありませんか？」

注意されて、女は座席の方へ眼をやつたが、そこに白いハンケチが落ちてゐるのを見ると、あわてゝ、拾ひ上げて、

「これ、あなたのでせう？」

「さう〳〵、これは失敗。」

男は笑つた。

女も媚を含んだ眼で笑つて見せた。

さうして、睦まじげに汽車を降りて行く二人の姿を、萬千子は熟ばんで眼で目送した。

四

車室を出て行く二人の姿を目送しながら、萬千子はまたしても一年前の回想にとらはれた。同じこの國府津の停車場から、丁度そのやうにして、啓三郎と二人で降りて行つた自分自身の姿を、萬千子はまざ〳〵とそこに描き浮べた。

それからあの塔ノ澤の一夜。そのあくる朝小田原の驛での辰夫との邂逅。後髮を引かれながら乘つた西行の汽車。

汽車は、今、あの時と同じコースをとつて西へ〳〵と走りつゝある――。

萬千子は一年前、啓三郎と一緒に乘つたこの汽車の中で感じたものが、そつくりそのまゝ、今、再びそこに蘇へつてゐる事を感じた。その時の、かうしてをられぬといふ激しい焦立、刻々に進み行く汽車の車輪の一回轉毎に胸を刻まれるやうな激しい悔い――それが今、一年前と全く同じかたちで彼女を責め立てるのであつた。

一年前、萬千子は、さうして一緒に乘つてゐるものが啓三郎であつて辰夫でない事を、どんなに口惜しい事に思つたらう？　それが一年後の今は、斯うして一緒に乘つてゐる者が、辰夫であつて啓三郎でない事が、この上もなく憾まれるのだ。おゝ、一年間！　一年間の歲月は、彼女の心の方向を、全く逆にかへてしまつたのだ。

それを考へると萬千子は我ながら不思議な氣がした。

（神樣）――と、萬千子は眼をつむつて、知られざる何ものかに向つて呼び掛けるのであつた。（神樣、これは一體何うしたといふ事でございませう。）

さうして、すつかり思ひ沈んでしまつた萬千子の樣子を眺めて辰夫はもう一度嘆息した。この人は、すつかり機嫌を惡くしてしまつた！

だが、また明日の朝にでもなつたら――と、辰夫は思ひ諦めたやうにして口を噤み、激しい氣疲に身を委ねて、同じやうにぢつと眼を閉ぢてしまつた。

同車の人達も、みなそれ〴〵の姿勢で、眠り入つた。山北、沼津と主な驛だけに停る急行列車が靜岡を過ぎたのはもう夜中過であつた。

萬千子は眼を閉ぢてゐたが、頭の中、胸の中では、さま〴〵の想念とさま〴〵の感情とが、亂れ合ひ鬩ぎ合つてゐた。その亂れ合ひ鬩ぎ合ふものは、しかし、次第に一つの焦點に向つて統べあつめられて行つた。

（啓三郎さん！）

彼女はかう心の中で呼んだ。かつて口にした事のない親しい調子で、さう呼びかけた時、彼女の眼には啓三郎の笑

顏が見えた。悲しい喜で笑つてゐる啓三郎の顏が見えた。

萬千子は、そツと辰夫の方を見た。辰夫はうつら〳〵と眠つてゐた。

十分ばかりの後、萬千子は、車室の外のデツキの上に、冷たい風に頰を吹かれて立つてゐる自分を見出した。

汽車は、濱松に近い平野を走りつゝあつた。傾きかけた月影が雲に閉ぢられ、平遠な展望は深い曉闇に籠められてゐた。

――萬千子は、その暗に閉ざされた空間に、あの啓三郎の面影を描いてゐた。

（啓三郎さん！）

と、彼女は再び呼びかけた。

萬千子は、たゞ一つの事をなし得る力だけが、自分に殘されてゐることを知つた。

たゞ一つの事――それは、もう一度この汽車から飛び降りることだつた。一年前に、さうしたやうに、この誤つた運命の軌道から脫出すべく、もう一度この汽車から飛び降りることだつた。

突然、車輪が轟々と響を高めた。鐵欄の交叉が彼女の眼前を掠めはじめた。暗の底に仄白く、天龍川の流が見下された。

彼女の眼が鐵欄の切れ目をとらへた刹那、彼女は、渾身の力を以て――あのフイールドに臨んだすぐれたるジヤンパーの勇氣と決斷とを以て、ひらりとその身を躍らした。啓三郎の面影をしつかりと胸に抱きしめながら――。

早春

一

又、春がめぐつて來た。

雜司ヶ谷の墓地の欅の梢も淡綠の若芽に煙つて、どことも知れず小鳥の囀がした。林立する墓標や石垣にしみ〴〵と沁み入る陽影もなごやかだつた。

槇村家の墓地の一隅に、比較的まだ新しい白木の墓標――それはいふまでもなく、萬千子の墓標だつた。

萬千子の死は、その當時の新聞にも、かなり感傷的な記事としてあらはれたが、しかし、たゞ、落魄した名流の、美しい令孃の薄命な死――といふ以上にさうした死にまで驅り立てられた彼女の生活の經過について、眞相を傳へたものはなかつた。死體はたうとう發見されなかつたが、型ばかりの葬式は、新聞記事を見て大阪から驅けつけて來た千尋を施主とし、小石川の叔父夫婦の手で擧げられた。叔父や叔母にいはせると、萬千子の死は、どんな事情からにせよ、全く自業自得といふものだつた。存亡の危機に家を見捨て、死の苦境に父を見殺にした我儘娘の、これは當然の報であり罰であつた。「どうせこんな事だらうと思つた。いはない事ぢやアない！」と叔母は口惜しさうに繰返した。そして、「せめてお前だけは」と叔母は叔父ともゝ〳〵に千尋に、そのいはゆる「改心」を促すのであつたが、千尋はたゞ閉口し、苦笑するより外なかつた。

千尋は、その後もしばらく大阪へ行つてゐたが、生活の都合で今年の初にはまた東京に舞ひ戻らねばならなかつた。彼の若々しい血は社會的情熱に燃えてゐたが、さしづめ、糊口の問題が彼を驅り立てた。彼は、今、活動寫眞の看板繪を製作する事などで、辛うじて、日々の糧を得てゐた。たつた一人の姉を失つて、千尋は、今や全くの孤獨だ

つた。孤獨でそして自由だつた。この自由が彼を喜ばした。彼は、屈託しなかつた。彼は常に快活だつた。

だが、あの不幸な姉を想ふ毎に、彼の心は悲に濡れずにはゐなかつた。――彼は、時々物に憑かれたやうにしては、姉の墓を訪づれた。

今日も、彼は姉の墓の前に立つた。香を捧げるのでもなく、花を手向けるのでもなかつた。彼は、帽子をとつてちよつとお辭宜をすると、そのまゝぢつと、白木の墓標に向つて、突つ立つてゐるのであつた。

――あのやうに美しく、あのやうに賢く、又、十分に教養もあつた姉が、どうして、あのやうに不幸ないたましい生涯を送らねばならなかつたのか？

千尋は、姉の墓標に對して、それを思ふのであつた。

要するに姉は、新しい時代に生きる事の出來ないブルジョア娘だつたのだ。姉の美しさ、姉の賢さ、しかして姉の教養――それ等は、みんなブルジョア的のものだつたのだ。溫室の中に咲いた花は、溫室の外の冷たい空氣には堪へられない。姉はブルジョア生活の溫室の中に咲いた花だつたのだ。

姉も生きようとしたのだ。新しい時代に生きようとしたのだ。だが、姉には生きる力がなかつたのだ。いや、ブルジョア的ないろ〳〵なものが、姉の生きる力を阻んだのだ。姉の美しさ、姉の賢さ、姉の教養――それ等は、皆、姉の生きる力に、消極的な作用をしかしなかつたのだ。とりわけ、姉のあの多感性、あのセンテイメンタリズム――それが、姉の生涯に禍したのだつた。

（姉さん！）

と、千尋は墓標に向つて呼びかけずにはゐられなかつた。

（姉さんは本當に不仕合だつた。姉さんは生きようとした。だが、姉さんは生きられなかつた。姉さんの生きようとして生きられなかつた生活を、見てゐて下さい。僕が生きて見せますよ。これは僕にとつても容易な事ぢやない。し

かし、僕は、きつと、生きて見せますよ。）

千尋は、そんな風に、姉の墓標に向つて語りかけずにはゐられなかつた。

二

千尋は、やがて墓前を離れた。

彼は、ともすれば悲に沈まうとする心を、強ひて引き立てるやうに、口笛を吹き鳴らしながら歩いた。

彼の睫毛はいくらか濕つぽかつたとはいへ、彼の頰には、若々しい血の色が上つてゐた。頰のほてりを、ひる下りの早春の微風がうすら冷たく吹いて行つた。

千尋がやがて、墓域を出外れようとする時、彼は、向うからうなだれ勝に歩いて來る一人の女に眼を止めた。じみな薄色のコートを着た小柄な十八九の娘は、手に花束をさげてゐた。

足許ばかり見て歩いて來たその娘は、すれちがふ時、初めて千尋に氣がつき、はツと驚の眼をあげた。二人の視線が、ぱつたり合つた。

「……。」

「……。」

互に何か牽かれるものを、刹那の心に感じた。無言の言葉が眼から眼へと通うた。

が、勿論互に見知らぬ二人だつた。微笑に似た表情の浮びかけた眼が、次の刹那に外らされ、二人は互の方向に歩み出した。

見知らぬ二人――しかし、運命の糸が近々と結び寄せてゐる二人だつた。娘は、美代子であつた。

千尋が美代子の何人であるかを知らぬやうに、美代子も千尋の何人であるかを知らなかつた。が、美代子は、千尋

を見た瞬間、どこかで見た事のある人のやうな氣がした。美代子自身はそれに氣がつかなかつたが、美代子はその時、相似た一つの面影を――心に刻まれてゐるあの萬千子の面影を、意識下の意識で聯想したのであつた。

美代子は五六歩ばかり歩いてから振返つて見た。

千尋は、口笛を吹き鳴らしながら歩いて行つた。

美代子は、また、うなだれ勝のもとの姿勢にかへつて靜かに歩み續けた。

美代子もまた、この墓地の中に、訪れるべき墓をもつてゐた。それは、あの庄作の墓だつた。庄作より少しおくれて亡くなつた父の墓だつた。

この廣い墓域の中でも、片隅の方に、ごちや〳〵と押しつけられたやうにしてある狹い墓地の中の一つ――かたばかりの竹垣で隣としきられた猫の額ほどの墓地には、小さい時に別れた美代子の母も眠つてゐた。母のためには、小さいながら兎に角一基の石碑が建てられてあつたが、父や庄作のは、たゞ白木の墓じるしが、二三本の卒堵婆に擁せられてゐるだけだつた。

美代子は、二つの墓じるしの前に花と香とを手向け、その前にうづくまつて、長い間手を合せた。

美代子は、禮拜し終つて立ちあがつたが、去りかねる思で、ぢつとそこに立つてゐた。

（おゝ、美代子。）

眼尻にしわをよせて、にこ〳〵と笑ひながら呼びかける父の顏が見える。

（美イ公！　どうした？）

さういひながら、片方しかない手をさし伸ばして、いかつい顏に似氣ないやさしい眼付で微笑みかける庄作の顏が見える。

（兄さん！）

と、美代子は、その庄作の幻影に向つて呼びかけずにはゐられなかつた。そして、美代子は、この前に面會に行つた刑務所の面會口で、そつと囁いた猪之助の言葉を思ひ出さずにはゐられなかつた。

「おれは知つてゐるのだ。――庄さんは、美イちやんを思つてゐたのだよ。何一言いはなかつたつて？　いへないだけ庄さんは苦しかつたんだ。――おれは、その事を美イちやんにいはうと思ひ乍ら、今までいへずにゐたんだがね――。」

美代子は、その言葉を思ひ出さずにはゐられなかつた。

（兄さん、本當？　本當？）

しかし、墓じるしは答へなかつた。

三

庄作を「兄さん」と呼んでゐた美代子は、實際血を分けた一人の兄のやうに庄作を思つてゐた。庄作の自分に對する愛は、兄の妹に對する愛だとばかり思つてゐた。その庄作が、矢張一人の男性が一人の女性を愛する愛し方で自分を愛し、その愛ゆゑに苦しみ拔いてゐたのだといふ事實――。美代子は、それを猪之助の告白から聞いた時も、容易く信じられないやうな氣がした。そんな事はない！　と、激しく打ち消したい氣がした。

しかし、さう告げられて見ると、今更のやうに、それと思ひあたる事ばかりだつた。何氣なく聞き過ごし、見過ごして來たその折々の言葉なり仕草なりが、新しい光に照らし出されたやうに、それ〴〵の意味を以て彼女の記憶に蘇へるのであつた。

彼は、よく、輕口めいた事をいつて、美代子をからかひ、美代子がむきになつて怒つたりすると、

「は、は！　冗談だよ。たゞ冗談をいつて見たばかりだよ。」

と、持前の、乾き爆ぜるやうな笑聲をあげて笑ふのが常だつた。

「美イ公、俺はお前に惚れてゐるんだぜ。お前がまだ子供の時分から、俺はお前の事ばかり考へてゐたものさ。をぢさんに頼んで美イ公を嫁にもらはうと思つた事も幾度だつたか知らないがね。」

笑ひながら、そんな事をいつた事も度々あつた。

「兄さん、またあんな出鱈目ばつかり――いやだわ、私。」

「いやかい？　美イ公はそんなに俺がいやなのかい？」

「あら、兄さんをいやだつてんぢやないのよ。」

「ぢや、どうだ？　美イ公、ひとつおれのお嫁さんになつて見る氣はないかい？」

「また、あんな事を――いやな兄さん。」

「なぜ、いやなのだい？」

庄作はひどく眞面目な顏つきになつてなじるやうにいふので、美代子は當惑して、庄作の顏を見返すのだつた。と、やがて庄作は肩を搖するやうにして笑ひ出す。

「は、は、冗談だよ。ちよつと、冗談をいつて見たんだよ。は、は、本當だと思つたのかい？　馬鹿な美イ公。」

何がそんなに可笑しいのか、庄作は、やけに大きな聲をあげて笑ふのであつた。

その笑には、何か異樣なものがある――。

それは、その時分でもいくらか氣がつかないではなかつたが、思へば、あの冗談にまぎらす哄笑の中に、深い苦と惱とが籠つてゐたのだ。美代子は今になつて、はつきりとそれを感じた。そしてあの最後に會つた夜、いくらかの醉ひに手傳はれた異常な興奮を以ていひ放つた彼の言葉――その言葉が、今、新しく彼女の耳を擊つのだつた。

「美イ公、お前は馬鹿だよ。お前にやア分らねえんだ。お前はな、口に出していはなきやア何も分らねえ女だ。長い間の俺の苦なんか、お前にやちつとも分らねえんだ。」

さうだ。本當に何といふ馬鹿な女だつたらう？　それほどの苦惱を眼の前に見ながら、自分は、ちつともそれに氣がつかなかつたのだ。いや、氣をつけようとさへしなかつたのだ。

（兄さん！）

と、美代子は、もう一度墓標に向つて呼びかけずにはゐられなかつた。

そして、心から詫ずにはゐられなかつた。

（は、は！）

しかし、墓の下からは、例の笑聲が聞えて來るやうな氣がした。

（は、は！　もういゝのだ。俺にとつては、もう何もかも過ぎ去つた事なのだ。）

と、そんな風にいふ庄作の聲が聞えて來るやうな氣がした。

（俺が死んで淋しいだらうが、お前には、猪之スがゐるからな。猪之スも當分暗え處で窮屈だらうが、そのうちに出て來るさ。二人で仲よくやれよ。――は、は！　美イ公、いつまでもそんな處で泣いてるもんぢやねえ、いゝからもう、歸れよ。は、は！　お前は、近頃ひどく泣蟲になつたな。プロレタリアは泣くもんぢやねえ。は、は、は！）

眸をあげて

一

雜司ヶ谷の墓地に姉の墓を訪れた千尋は、その歸にふと、早稻田南町にある友人の家を訪ねて見る氣になつた。前に、叔母の家を飛び出してK畫塾での友だちの瀨川と同居した時分、瀨川を通じて知り合つた築井といふその男は、瀨川同樣、貧乏な畫學生であつたが、瀨川のやうな藝術至上主義者ではなく、千尋のはひり込んで行つた運動や思想にも十分の理解と共鳴とをもつてゐたので、瀨川とよりももつと親しい交際を、それ以來ずつと續けてゐた。

築井秀彥が、一人の妹の冬子と暮してゐるその家を訪ねると、丁度そこに瀨川も來合はせてゐた。

「やあ、槇村君。」

まばらな顎髯などを延ばして、相變らずみすぼらしい樣子をしてゐる瀨川は、はひつて行つた千尋を見迎へると、主人よりも先に、頓狂な聲で呼びかけた。

「どうも、どえらい事が起つたんだよ。」

と、瀨川は、ひどく興奮して千尋が座に着くのを待たずにいふのであつた。

「實に、實に驚くべき事件なのだ！　食ふや食はずの貧乏畫家が一朝にして百萬長者のあととり息子だ！　いや、實に驚くべき幸運だ。ど、どえらい事だ！」

語るのではなく、むしろ、叫ぶのだつた。

「馬鹿に景氣のいゝ話ですね。どういふ事なんです？」

千尋は笑ひながら問ひ返した。

主人の秀彦は――彼は、千尋より三つ上の二十二歳だつたが、どこか老成な重厚の風ある青年だつた。彼は、千尋の方へ微笑を返しながら、

「いや、別にたいして驚くべき事でもないんだ。――たゞ、僕等の身の上に一寸した事件が起つたといふだけの事なんだ。」

「一寸した事件だつて、これが一寸した事件だつて――。」

瀬川は叫びながら茶碗を取りあげてぐッと呑んだが、咽せて、激しく咳き入つた。

「あら、瀬川さん、それ槇村さんにさしあげたお茶よ。」

冬子がそばから笑つた。裁縫仕事などして貧しい兄につかへてゐる冬子は、白く咲く冬の薔薇のやうな清楚な娘で、年は千尋と同じく十九だつた。

「や、これは失敬！」

と、瀬川は更に咳き入りながらも、

「一寸した――一寸した事件どころか、これは一つの奇蹟だ！　奇蹟的な幸福といふものだ。いや、實に、ど、どえらい事だ。まるで夢のやうな話だ！」

「どうしたのですか？」

千尋は秀彦の顏を見上げた。秀彦の顏にも、明らかにある興奮が見られたが、口許には、むしろ迷惑さうな微笑が浮んでゐた

「僕等の親父が發見されたんだ。――十日ばかり前、突然、先方から人がやつて來てね。」

秀彦はいつた。

「親父？――君達の？」

「君にはまだ話さなかつたが、僕等兄妹は、親父といふものを知らなかつたんだ。――その親父が、今度見つかつたつてえわけなのさ。別にこつちから探してたわけぢやアないが、向うで僕等を見つけ出したんだね。」

「それが百萬長者なんだ！　その上、その家にや繼嗣者がないんだ。築井君が、つまり、その百萬長者の繼嗣者として迎へられようッてえのだ。」

と、瀬川が叫んだ。

「それで、迎が來たんだね？」

「うん。まあ、さうだ。」

と、秀彦は重くうなづいて、

「會つてくれといふから、兎に角會つて見たんだ。妹と二人で、昨日その親父といふ人間に會つて見たのだよ。勿論、それまでには、いろ〳〵僕たちも考へて見たんだがね。兎に角會ふだけは會つて見たよ。」

「それでどうだつた？」

と、千尋は問うた。

二

「いやな奴だつた！　どうせ、ろくな人間でない事は分つてゐたが、あゝいふのを、お前の父親だといつて眼の前に見せつけられると、何だか、自分の生存そのものを侮辱されたやうな氣がしたよ。」

と、秀彦は吐き出すやうにいつた。

「だつて、君――。」

と、瀬川は、躍起となつて口をはさんだ。

「それが素晴らしい大金持で、しかも、君をその後繼者にしてくれるんだつてえのに、ちつとやそつとの不愉快ぐらゐ我慢しなきやア嘘だよ。つまらん意地を張つて、この幸運を取逃がすつてえ事アないよ。」

「は、は——。」

と秀彦は、瀨川の方へ冷たい笑顔を投げつけて、

「大金持だらうが、大金持の後繼者だらうが、僕ア、そんな事は嬉しくはないんです。瀨川君も、かりにも藝術家を以て任じてゐる人なら、すこしは僕の氣持を分つてくれてもいゝと思ふね。人間といふものはさう、功利的の打算だけで生きられるものぢやないからね。」

「いや、功利的の打算ぢやアないよ。藝術のためなんだ。ねえ、お互に今のやうにその日の糧に追はれてばかりゐるやうな境遇ぢや、ろくな繪は描けやしないよ。——君が、そのお父さんのとこへ歸つて見給へ。全く生活の苦勞から解放されて悠々と藝術を樂しむ事が出來るんだ。行き度がつてゐるフランスへだつて行けるぢやアないか？」

瀨川は、こゝで、急に、顏を突き出し、言葉をはずませるやうにして、

「君、君！　君が若しフランスへ行くやうになつたら、僕も一緒につれて行つてくれ給へよ。ねえ、鞄持として隨行させてくれ給へ。これだけは今から輕んで置くぜ。」

「まあ、そんな事になつたらね。」

と、秀彦は苦笑してから、千尋の方へ向いて、

「事實、親父にや違ひなからうがね、しかし、今まで見も知らない人に突然會はされて、俺がお前の親父だといはれたところで、こつちはたゞ面喰ふばかりだよ。親子の情合なんてものは、ちつとも感じられやしないんだ。まして、僕等は、その親父だといふ人間が、僕等の亡くなつた母に對してどんな事をしたかつて事をよく知つてゐるのだ。勿論、みんなあとで聞いた事だがね、僕等の母は、その邸に小間使奉公をしてゐたのださうだ。それを、よくある事だ

がね、そこの主人が、むしろ凌辱的に弄んで、たうとう一人の子供を生ましてしまつたんだ。その子供といふのが、つまり僕なのさ。母はその時たつた十七だつたんだ。それから貧乏な植木職人の娘だつたさうだから、多分、生活上やむを得なかつたのだらう？　お妾といふ事になつて、三四年その男の世話になつてゐるうちに、次の子供が——つまり、この多子が生れたんだが、多子が生れる時分には、もう殆ど構ひつけちやくれなかつたさうだ。そのうち、母は病氣になつて悶死する、あとに殘されたのが、僕等二人の兄妹だ。母の父——僕等の祖父は、幾度も僕等のために、その邸へ出かけて行つたのださうだが、主人はてんで會つてもくれず、その都度、押借同樣に追拂はれて、僕等は、もうまるきり生活能力のない喘息持の六十爺さんと一緒に、路頭に迷つてしまつたんだね。——祖父は、僕等の親父の名をいはずに死んだ。たゞ、お前達の親父は、この東京に大きな邸を構へたれつきとした紳士だが、あれは、人の皮を着た獸だ！　あんなものが、父親だと思へば腹が立つばかりだから最初からないものと思へ。僕が十歳の時に祖父は死んだのだがね、死際にかういつてぽろ〳〵と涙をこぼしてゐた——。」

秀彦は、そんな風に語り續けた。多子はうるんだ眼を膝におとし、全き共感を以て兄の言葉に聽き入つてゐるやうに見えた。

「だけど、さういふお父さんがどうして急に君達を引取らうなんていひ出したの？」

と、千尋は疑問をはさんだ。

「矢張、そこが親子なんだよ。親は親だ！　君達のお祖父さんは多分誤解してゐたんだと思ふな。」

さう瀨川がいふのを、耳にもかけずに、秀彦は吐き出すやうにいつた。

「なあに、みんな向うの都合からなんだ。つまり、僕等が必要になつて來たので、急に、忘れてゐた僕等の事を思ひ出したわけなのさ。」

三

「君たちが必要になつて來た？」

千尋は問うた。

「さうだ。――その家の後繼者の一人息子が最近病氣で死んだのだ。つまり、僕等には異腹の兄に當るその家の長男なんだがね、それが死んだので、折角の財産も讓るべき者がなくなつたんだ。そこで、まるきり他人のものにするよりは、捨てた子にしろ兎に角子は子だからね、まあ僕達に讓り渡した方が、まだいくらかましだつてわけなんだらう。長男に死なれてから、自分の方でも健康をそこねたとかで、何だかひどく弱つてゐるらしいんだ。それで、急に心細くなつて來て、今まで忘れてゐた僕等の事を思ひ出したらしいんだね。若し親父が本當に僕等を愛してゐたんなら、とつくに何とかしてくれなきやならないのに、今まで知らん顔をして拋つて置いて、自分の都合が惡くなると思ひ出して、呼び寄せて財産の番人にしようつて腹なんだ。父親としての愛情のためといふよりもむしろ所有慾の滿足のためなんだ。いや、僕だつて父親としての愛情は全然認めないといふんぢやないさ。だが、その愛情がひどく不純なものである事を考へると、おいそれと、いふ事を聞いてやる氣にはなれないのだよ。」

「さうですわ。」

と、今まで默つてゐた多子がその時言葉をはさんだ。

「本當に、私達を愛してゐたつてのなら、今までうツちやり放しにして置く筈はないでせう？　みんな自分の都合からなんだわ。あんな人、私、どうしてもお父様なんて思へないわ。」

多子は、同意を求めるやうに千尋の方を見上げた。

「それは、さうですね。」

と、千尋もうなづかざるを得なかつた。

「會ひ度いといふから、兎に角會ふ事は會つた。――病氣で寢てゐたがね、ひどく傲慢な態度なんだ。そして、邸に引取つてやるといふ事をひどく恩惠的にいふんだ。許せないのだが、許してやるのだといふ風にね。馬鹿にしてやがる！　許せないのはこつちなのだ。許してやるとすれば、こつちからこそ許してやるのだ。」

「いゝえ、私許せないわ！」

と、多子は、その白い頰を仄かに赧らめていつた。

「私、どうしても許せないと思ふわ。私、私たちのお母さんがどんなに苦勞したか、それを考へないでは居られないわ。私は女だから、女の苦はよく分るやうな氣がしますわ。私、死んだお母さんのためにも決して許せないと思ふの。」

彼女の、聰明な理智的な眸の中にも、激しく燃えるものがあつた。

「だが、多子さん！」

と、そこで又發言の機會をつかんだ瀨川は、躍起となつていふのであつた。

「そのお邸へ引取られて見たまへ。あんたは一躍して大ブルジョアのお嬢様だよ。晩日を前にして內職のお針仕事に徹夜する心配もなけりや、その綺麗な手を水仕事であれさせる必要もなくなるんだ。ね、さうして行く行くは、同じやうにどこかの――もしかしたら、華族か何かの令夫人として納まる事になるんだ。」

「いやなこつたわ！　私、ブルジョアのお嬢様なんかになりたいとはちつとも思はない。私は貧乏な娘の腹から生れた女だから、矢張り、貧乏な娘でいゝんです。かうしてゐるのが、一番氣樂でいゝのよ。」

多子はきつぱりといつた。

「どうも驚いたなあ！　君たち兄妹は、揃ひも揃つて、どうしてこんな變りものなんだらうなあ。」

瀨川は嘆息した。

「僕はね。」

と、秀彦は冬子の顏と千尋の顏とを等分に見ながらいつた。

「僕は大丈夫だが、妹の方は、或ひは誘惑に動きやしないかと思つてたんだ。ところが、どうして、冬子の方が一層強硬なんだ。こりやア、或ひは君の影響かも知れないね。」

「あら！」

と、冬子は、そのほつそりとした身體に、少し、しなをして、顏を紅くした。

千尋もいくらか紅くなつた。

四

「それで、ぢやア、斷つてしまつたんですか？」

少し紅くなりながら、千尋は訊いた。

「面と向つてぢやア、ぴたりと斷ツちまふのも流石に氣の毒な氣がして、まあ、考へて見ようといつちやア置いたがね。勿論、斷つてしまふつもりだ。」

秀彦はいつた。

「本當に斷ツちまふつもりなんか？　本當に？　實にどうも君達は――。」

と、瀨川は再び叫ぶやうにした。

「兄さんは氣がお弱いのよ。その場で、ぴたりと斷つてしまつたら、どんなに氣持が宜かつたでせうに。あんな人が私達のお父様だなんて、――馬鹿にしてゐるわ。」

冬子は、細い、しかし濃い眉をぴりゝと動かしていつた。

「つまらない意地だ！　つまらない意地を張つて、折角の幸運をとり逃がしてしまふんだ。何てえことだ。」

と、瀨川は呻くやうにいつた。

「向うぢや、二つ返事で邸へ戻つて行くものと思つてゐたらしいんだ。その非常な恩惠に對する感謝の涙を以て――だね。だから、僕等が、たいして嬉しさうな顏をしないばかりか、むしろ迷惑さうな顏をして見せると、ひどく面喰らつたらしいよ。は、は！　僕等が何か聞き違へをでもしたかと思つたらしく、何度も繰返していふんだ。これから與へようとするかず〳〵の恩惠についてね。は、は！　だが、さういふ恩惠は實際僕等にとつてさうありがたいものぢやないんだ。僕アかういつてやつたんだ。僕達にとつてはあなたが與へて下さらうとする幸福は、あまり大き過ぎるやうです。幸福も餘り大き過ぎると却つて不幸になるものです。僕等は今まで隨分多くの不幸を通り拔けて來て、やうやく、ほつと一息つけるやうな氣持になつてゐるのですから、もうこの上の不幸は眞平です――とね。だが、この皮肉は矢張り通じなかつたやうだ。」

秀彦の後について、冬子がいつた。

「そんな廻りくどい事をいつたつて仕方がないわ。私、今私達がお邸に引き取られたりしたら死んだお母さんに濟みませんから――つて、餘程さういつてやらうかと思ふのよ。」

「さうですよ。」

と、千尋も、思はず興奮しながらいつた。

「ブルジョア生活が、どんなに間違だらけなものであるかを僕は知つてゐます。間違だらけで、腐り切つてゐて、そのくせ、彼等自身にとつて恐らくちつとも幸福ではないのです。今更、ブルジョアに降參したつて仕樣がないですよ。」

「いかん、いかん！　君は過激派だからいかんよ。」

と、瀬川はやせた咽喉佛を鷄のとさかのやうに顫はしながらいつた。

「すぐに、ブルジョアだとかプロレタリアだとかいつて角目立つからいかんのだよ。ね、槇村君、それは人情だよ。父としてその子に財産を遺し度いといふのはこれは人情なのだ。感情上の問題なのだ。」

「だから、感情上の問題としていふのよ。私達にはねつけられて、あの人が、父としての感情をいくらかでも傷つけられたとすれば、それだけ私たちの復讐が出來たッてものよ。さうだわ！　死んだお母さまのために復讐してやるのだわ！　ねえ、千尋さん。」

と、多子は千尋を、その凉しく澄んだ眼で凝視るやうにして、

「こんな風に考へるのは惡い？」

「ちつとも惡かアないですよ。」

「多子さんは何だな？――さうして金持のお嬢さんになつちまふと、千尋君と別々になるんで、それで、そんな事いふんだな。」

瀬川は、多子と千尋との顏を見較べながらいつた。

「まあ、何いつてゐるのよ。つまらないことを――。」

「馬鹿な事を。」

二人は、同時にかういひ、赧らめた顏を見合はせた。

五

顏を赧らめ合つた二人を見やりながら秀彦は笑つた。

「は、は！　さうかも知れないね。何しろ、多子は、千尋君とはすつかり合口なんだからね。」

「まあ、兄さん、兄さんまで――。」

多子は、兄を睨むやうにして、

「私、たゞ、亡くなつたお母さんの事を考へるんですわ！」

「亡くなつたお母さんのことだか、生きてゐる千尋さんのことだか、こいつは疑問だ。だが、多子さんがそのお邸の人になれば、千尋君だつて從つて大いに幸福になれるわけぢやアないかね？　多子さんが、その、何といつたかな？小野寺――さう、さう！　小野寺家の令嬢として迎へられたら――。」

「小野寺？」

瀬川の言葉を途中から搔きさらつて、千尋は思はずかう反問せざるを得なかつた。

「小野寺ッていふんですか？　あなたのお父様だといふ人は？」

「小野寺謙三――實業家としてちつとは知られてゐる人間ださうだね。」

秀彦は、さう答へたが、千尋の顏に浮んだ驚の表情に氣がつくと、

「君は知つてゐるんですか？」

と問ひ返した。

「あら！　私、今まで氣がつかなかつたけど――。」

と、千尋が答へ惑うてゐる間に多子が、殆ど叫ぶやうな調子でいつた。

「新聞で見ましたわ。小野寺といふのは、あの亡くなつた千尋さんのお姉さんのおかたづきになつた――？」

萬千子の死を報じた新聞は、萬千子が一度小野寺家へ嫁したといふ事實を傳へてゐた。多子はそれを思ひ出したのだつた。

「あ、さうか？　僕も思ひ出したよ。――さうか？　實に奇妙な廻り合はせだねえ。」
秀彦も思はず嘆聲を發した。
「な。なアるほど！　こいつは奇緣だ。かうなると愈、君たちは小野寺家に戻つて行かなきやならん義務があるぜ。」
と瀨川は頓狂な聲でいつた。
「馬鹿な！　それと、これと、どういふ關係があるのだね？」
秀彦は笑つた。
彼等が、そんな風に語り合つてゐる時、この家を訪ねるための自動車が、北町から矢來への廣い通を、のろ〳〵と走つてゐた。車上の人は小野寺謙三氏だつた。去年の暮から、心臟に故障を起してゐる小野寺氏は、血色を惡く、ひどく憔悴してゐた。自動車へ乘つても、普通に走らせる事が出來ないほど、小野寺氏は弱つてゐるのだつたが、さういふ病體を押して出掛けて來たのは、一刻も早くあの兄妹を邸に迎へ取り度い熱望に、性急にかり立てられたゝめだつた。
啓三郎の死は、流石に剛毅な彼の胸にも、曾て知らぬ一種の寂寥感をもたらした。その時彼はもう殆ど忘れてしまつてゐた昔の女を思ひ出し、その女に生ませた二人の子供を思ひ出した。手蔓をたどつて探すと案外造作もなく所在が知れた。――そこに、立派な一人の青年として育ちあがつてゐる息子を見、立派な一人の處女として育ちあがつてゐる娘を見た時、小野寺氏は、未だ經驗した事のない激しい感動に引つかまれた。何ものかに對する大きな感謝！二人を眺める小野寺氏の眼は我知らず涙に曇つて行つた。
――だが、何といふ思ひ掛けない二人の態度だつたらう。二人は飽くまで冷然としてゐた。邸に迎へ取り、全財產を讓り渡すといふ申し出、二つ返事で受容れられるだらうと豫期した申し出、夢のやうな幸福として、狂喜を以て受取られねばならぬ筈の申し出、その申し出に對して彼等の酬いたものは、たゞ當惑さうな苦笑だつた。そして、その

やうに寬大な慈悲深い父として手を差し伸した彼を迎へたものは、異邦人のやうな冷やかな眼付だつた。
あいつ等は何か誤解をしてゐるのだ。そんな筈はない！　そんな筈はない！
小野寺氏は、その脂肪で壓迫された心臟の鼓動に喘ぎながら、かうその心の中で繰返すのであつた。

六

誤解してゐる――實際、小野寺氏には、さうより外思へなかつた。――こちらの好意がまだ十分に通じないのだ。で、なければ、餘り大き過ぎる幸福の前に彼等は狼狽してゐるのだ。いや、その幸福が餘り大き過ぎるので、彼等は信じる事が出來ないのだ。
――さうだ。信じる事が出來ないのだ。
小野寺氏はさう思つて、強ひて微笑しようとした。
が、微笑は直ぐに消えた。
いや、そんな事はない。俺はあれ程明瞭にそれを彼等に告げたのだ。まさかに、彼等が俺の意思を疑ふわけはない。彼等に、あゝした冷たい態度を執らせたものは、狼狽でもなければ不信でもない。そこには、それ等とは違つた、何か別のものがある。
その時、小野寺氏は、ぢつと自分を凝視てゐた彼等の眼を――とりわけ、娘の眼を思ひ出した。
あの娘が、どんなに、あの女によく似てゐる事であらう？　あゝお前はお前のお母さんにそつくりだ！　と、口には出さなかつたが、一目見た瞬間、思はず、心の中で叫んだのだつたが、その娘の眼！　薄く涙を溜たその眼の中からば、恨に燃えるもう一つの眼が覗いてゐた。それはあの女の眼だつた。自分の腕の中で顫へながら、自分のために二人までも子供を生んだあの憐れな女の眼だつた。

――憐れな女！　小野寺氏はそこにあの女を思ひ出さずにはゐられなかつた。二人の子供を生ませながら、たゞ、「倦きた」といふ理由から弊履の如く捨てゝしまつたあの女を。小野寺氏は、あの女に對してどんなに不實な慘酷な自分であつたかを思ひ出した。あの女の死の知らせを受取つた時でさへ、眉毛一筋動かさうとはしなかつた。

恨を呑んで死んで行つたあの女の眼が、あの娘の眼の中から覗いてゐるのだ。さうだ、あの娘は――彼等兄妹は、自分を恨んでゐ、憎んでゐ、自分に激しい敵意をもつてゐるのだ。

勿論、それは小野寺氏と雖も、全然、期待しなかつた事ではない。彼等が、自分に對して或る惡感を藏してゐるであらう事は、彼もある點まで想像してゐた。

だが、今、自分の持ち出した條件――この無上の恩惠の前に、それ等の惡感が何だらう？　正式の子として邸へ迎へ取つてやらうといふのだ。莫大な財産をそつくり讓り渡してやらうといふのだ。食ふや食はずの境遇から、おそらく夢に見た事もないであらう大ブルジョアの生活にまで引上げてやらうといふのだ。この恩惠は、どんな恨をも、帳消にしてあまる程のものではないか？

然るに――然るに、彼等は、この恩惠を冷笑を以て拒まうとするのだ。彼等には、今、彼等に與へようとする小野寺家の大財産が塵芥としか見えないのだ。

かう考へて來た時、小野寺氏の胸は、一種の憤で充たされた。自分が六十年の努力を捧げて蓄積したもの。全生涯を傾けて獲得したもの――それに對するこの蔑視は、とりも直さず自分の存在そのものに對する蔑視に外ならなかつた。彼等の拒絶は、彼のうちに眠ざめた「父」を恥かしめたばかりではなく、彼の「人」をも、極端に恥かしめた。その恥かしめの前に、彼は激しい腹立を感じざるを得なかつた。

さうだ。あいつ等も、矢張り、あいつ等の仲間だつたのだ――。

小野寺氏は、その新しく見つけ出した息子の言葉の中に、あの工場の職工共の口吻があつた事を思ひ出した。する

と、小野寺氏の前には、てんでに、喚きながら拳を振ひながら、怒濤のやうに自分の眼の前に押寄せて來る大群が描き出された。その中に交つてゐる兄妹の姿が描かれた。だが、あいつ等は俺の子なのだ。血を分けた俺の子なのだ。小野寺氏は、その不安を打ち消すやうに、強ひてかう繰返した。

俺の子なのだ。――俺はあいつ等の父親なのだ。

しかし、自動車がその目的地に近づくにつれて、小野寺氏の不安は次第に加はつて來た。不安ばかりではない。一種の恐怖に似た氣持さへ交つてゐた。剛愎な小野寺氏は、六十年の過去においてかつて經驗した事のない、妙に氣弱な躊躇がそこに感じられた。

「おい、古川！」

と、彼は運轉手にいつた。

「もう少しゆつくりとやつて呉れ。心臟が苦しくていかん！」

街頭の雨

一

春の雨が、街路樹の綠に降りそゝぎ、鋪道を濡らしてゐた。飾窓や店頭からなげ出された光線が、濡れた鋪道を錫色に輝かし、そのところ〴〵を、リボンを並べたやうに、異つた色彩で染めわけてゐた。雨にもかゝはらず、宵の銀座は相變らず賑だつた。

その人通りの中に交つて、傘もなしに、濡れながら歩いてゐる一人の男があつた。黑い羅紗の外套に包まれた肩はがつしりとはしてゐたが、少し猫背にかゞめられ、茶色の中折を前のめりに、深く頂を落してのろ〳〵と歩いてゐた。暗い光を鈍くたゝへた眼を、眼前二三尺のところに落したまゝ、一歩一歩を重く引ずるやうにして歩いてゐるその男の姿は、それだけ殊に周圍の雰圍氣から切りはなされたものゝやうに見えた。

――彼は石田辰夫だつた。

彼はすべてのものを失つてしまつた。今まで彼の生活を、意義づけてゐた二つのものを、二つながら失つてしまつた。

二つのものゝ一つは社會的情熱だつた。彼は、一身を、その人類更生の輝かしい事業に捧げて、いさぎよく階級戰の陣頭に死なうとした。その覺悟の前に、戀をすら拋つた。が、他の一つのものが――戀がそれを妨げた。拋ち去つた筈の戀が、再び彼に還り、再び彼を支配した。

が、今やその戀もまた失はれた。萬千子は彼を捨てゝ死んで行つた。

二つのものを二つながら失つた彼の心に何が殘されてゐるか？　何もなかつた。そこに殘された何ものもなかつた。

恥と悔とを外にしては――。

「裏切者。」

「スパイ。」

これが彼の元の同志が彼に與へた名であつた。ついさつきも、彼は路上であの大川に逢つたのだ。大川の他に、渡邊がゐた。その他若い二三人がゐた。

「おい！　石田。」

さう呼びかけた大川の眼には、極度の侮蔑が籠つてゐた。彼は大川のその炬のやうな眼を見迎へる勇氣がなかつた。

「どうした？　女は――？　そのためにお前が俺達を賣つた女はどうした？」

大川は嘲笑と共にいつた。

「女に逃げられたつてのは本當か？　それで、そんなぼや〳〵した顏をしてゐるのか？　は、は！　みじめな奴。」

大川はさういつて笑つた後、拳を振つて飛びかゝらうとする若者達を押しとゞめた。

「うつちやつとけ！　うつちやつとけ！　こんな奴を今更問題にする必要はないのだ。毆るだけの値打のある奴なら毆るのもいゝが、こんな奴を毆つたつて仕方がない。」

――今、さうしてのろ〳〵と歩きながら、辰夫は、それ等の大川の言葉を思ひ出し、その極度の侮蔑に對しても、一語をすら酬いる事が出來ず、たゞ、力なく首を垂れてゐる外なかつた自分を思ひ出した。

裏切者！　スパイ！――彼等は明かに自分に對して或る誤解をもつてゐる。だが、結局、自分はそれ等の惡名にしか相當しない人間だつたのだ。

彼は、その恥に對して憤る事の出來ない自分を感じた。それゆゑに、一層みじめな、救はれがたくみじめな自分

を感じた。

——彼は思ふのだつた。

俺は勃興階級の先頭に立つ事に俺の使命を見出さうとした——それが俺の過失だつたのだ。俺は矢張り、沒落しつつある人間の一人に過ぎなかつた。沒落階級——ブルジョア・インテリゲンチヤ。俺はそれ以外の何ものでもなかつたのだ。

いや、それを全く感じずにゐたわけではない。俺は畢竟、一個のネヅダノフかも知れないとは思つてゐた。だが、少なくとも、一個のネヅダノフではあり得ると思つてゐたのだ。

さうだ。少なくとも一個のネヅダノフではあり得ると——。

だが、おれはそれですらもあり得なかつた。おれは、たゞ、一個のルウヂンでしかなかつたのだ——。

二

先刻から降り出した雨は、次第に雨勢を強めて來た。

辰夫は、濡れながら歩いた。重い歩を、一歩々々、鋪道の上に刻みながら——。

何しにこんな處を歩いてゐるのだ？

そして、どこへ行かうとするのだ？

どこへ？——俺は、どこへも行く處のない人間だ。

辰夫はさう思ふのだつた。

要するに俺はこの世の中にとつて一個の餘計者でしかないのだ。

餘計者！　まるきり生存の意義を失つた人間！

「死ね！」といふ叫が心の中でした。

——辰夫は、萬千子に死なれてから、幾度も、萬千子の後を追ふ事を思つた。だが、彼には、敢然として死につくだけの勇氣さへなかつた。萬千子には啓三郎がある。死のあなたでも自分は矢張餘計者なのだ。

のために死んだのだ。萬千子を死へ誘うたものが何であるかを了解した。さうだ、萬千子はあの啓三郎

餘計者、餘計者と、辰夫は繰返した。

雨勢は次第に強くなつた。

彼は、ふと眼についたカツフエのドアを押した。ドアの中にのめり込むやうにした。

卓に着くと、

「ウイスキイ。」

と命じた。醉の外には彼を救ふものはなかつた。

「もう一つ——。」

彼の前には、ウイスキイのグラスが三つまでも並んだ。

「隨分召上るのね。そんなに、急に、ぐいぐいとお飲みになつちや毒よ。あまりお強さうでもないのにね。」

女給仕がいつた。

「ソーダか何かさしあげませうか？」

「いや、いらん。」

と、辰夫は手を振つてから、その手で卓の上に頰杖をつき、ぢつと眼を閉ぢた。たとへば溺死者などの場合、生涯の全部がその死の刹那の意識をひらめき過ぎるといふ事だが、丁度そのやうに、辰夫の閉ぢられた瞼の裏には、十年の過去が、フイルムのやうに飛轉した。最後に、クローズ・アップされた萬千子の顏が殘つた。

ふと、がん〳〵と鳴る耳鳴に交つて、隣の卓で話してゐる話聲が聞えた。

「俺は懐疑派だよ。俺の眼から見れば、人生なんて畢竟惡魔の饗宴さ。は、は！」

惡魔の饗宴――その言葉が不思議に強く辰夫の心に響いた。辰夫は、それがどんな人間の口からいはれたのか、眼をあげて隣の卓を見やるのさへものうかつたが、一語は強く彼の胸に刻まれた。

さうだ。それに違ひない。しかして、さうより外思はれない俺も、矢張懐疑派なのだ。さうだ。おれは今一個の懐疑派に過ぎないのだ。

「どうなすつたの？　お氣分でもお悪いの？」

深く卓の面に沈み込んだ彼の様子を見ると、女給仕が心配さうに訊いた。

「いや、何でもない。――こいつをもう一つ。」

空になつたグラスの臺でかちりと卓の面をたゝくやうにした。

「あら、駄目！　もうそんなに召上つちや。」

「いゝんだ。大丈夫だよ。」

もう一杯のウイスキイを乾すと彼はすつかり醉つた。卓の上に突つぷしてうと〳〵とし初めた。

さうしてどれだけの時間が經つたか分らなかつた。愕然としてさめて、又、ふら〳〵そのカツフェを出た時は、街はもうかなり更けてゐた。雨も小降になつてゐた。醉はまだ殘つてゐたが、頭の一部は妙に冴え返つてゐた。

どこへ行くところもない――といつて、つめたい下宿の蒲團に歸る氣にもなれなかつた。

彼は、又、ふら〳〵と歩きつゞけた。

しばらく歩いてゐると、次第に醉がさめて行つた。

彼は再び酒を欲した。

三

辰夫は再び酒を欲した。と、丁度またそこに、一軒のカツフェが眼についた。辰夫は再びドアの中によろめき込んだ。

裏通なので、その上もう夜更なので、あたりはひつそりと靜かであつたが、内部は客が一杯で、あまり廣くないホールは、ひどく賑に騷々しかつた。

あかる過ぎるほどの照明も、もや〳〵と立ちこめる煙草の煙に打ちかすんで、醉の出た顏を崩して笑ふ者、グラスを嘗めながら饒舌を振ふ者、身體をなゝめにし、眼を閉ぢて何か歌ふ者、それ等の人のすがたがその中で亂れ動いてゐた。

五六人の女給仕達は、或は長い袖を靡しながら卓から卓へと移りゆき、或は客の卓に坐り込んで萬遍なく嬌笑を振撒いてゐた。

スタンドに近い方の卓を圍んだ若い學生らしい五六人は、しきりに、活動女優の評判か何かしてゐたが、話に交つてゐた女給仕の一人が、

「ネグリはいゝわねえ。私、大好きよ。」

と相槌を打つてから、小聲で、

（ネグリ、ナルデイ、スワンソン

娘スターになるまでは――。）

かう口吟んだのをきつかけに一團が聲を合せて歌ひ出した。

（東京銀座は

怖ろしところ
虎と獅子とが酌に出る
……
注いだリキュールの薄情
たとひ百夜を來ればとて
……)

流行の銀座節といふのを、その一團が樂しさうに歌ひ出すと、入口に近い卓の、矢張學生らしい二三人が、醉に亂れた聲でそれに壓しかぶせて歌ひ出した。情熱的な激越な調子で——。

(……
しかばねかたく冷えぬ間に
血潮は旗を染めぬ。
……
卑怯者、去らば去れ
われ等は……まもる。)

銀座節の方でも負けぬ氣で聲を高めた。二つの歌の、奇妙な合奏が、しばらく、他の騷音を壓して、ホールの中を一杯にした。女たちは皆、銀座節の方へ味方をした。が、中で一人、小聲で、もう一つの歌の方に調子を合せて歌つてゐる小柄な綺麗な女給仕があつた。彼女は、窓際によりかゝるやうにして、顏を暗い窓際に向けながら、小聲で、

(卑怯者、去らば去れ——。)

と、かの一團の合唱につれて口吟んでゐた。

自分の持番でなかつたので、彼女は、先刻はひつて來た一人の客についてはまるで氣がつかずにゐた。その客は、棕梠竹の蔭の卓に身を潛めるやうに坐つて、默々としてウイスキイを舐めてゐた。勿論、それは辰夫であつた。

(卑怯者、去らば去れ——。)

その歌の文句が辰夫の胸を刺した。辰夫には、それが自分を對象として歌はれてゐるものとしか思はれなかつた。更に辰夫は、その歌と調子を合せてゐる女給仕の方へ眼をあげて、それが誰であるかを見た時、愕然として思はず椅子から立ち上らうとした。

その時、女給仕の方でも、辰夫に氣がついた。彼女の眼にも驚の色が浮かんだ。彼女は美代子であつた。

「石田さん!」

美代子は、思はず斯う叫びながら走り寄らうとする衝動を、辛うじて抑へつけた。

と、次の瞬間、辰夫は一枚の紙幣を卓の上に殘すと、逃げるやうにドアの外へ出て行つてしまつた。

「まあ、をかしな人。」

と、その奇妙な客の番に當つてゐた女給仕は眼を瞠つていつた。

「おつりも取らないで行つちやつて——チップにしちや多過ぎるわ。」

さう美代子に向つて囁いたが、美代子が、その後を追はうとでもするやうに、よろ〳〵とドアの外へよろめき出たのを見ると再び驚の眼を瞠らずにはゐられなかつた。

四

美代子は、思はずドアの外によろめき出て、五六間先の薄明に黑い影繪を描き出してゐる辰夫の後姿を見送つた。

雨は又強く降り出してゐた。その雨に濡れながら、うなだれて歩み去る辰夫のひどく力なげな後姿——それが春雨にけぶる暗の中に消えて行くまで、美代子は、いつまでも〳〵見送つた。

「どうしたのよ。」

と、仲間の女給仕は肩をたゝいて、

「あの人知つてるの？」

「いゝえ。」

美代子はやうやく我に歸り、極り惡く頭を振つた。

「知らないの？　あら、だつて——。」

と仲間は眼の隅から笑ひ掛けた。

「いゝえ。——ちよつとね、間違へたんですの？」

美代子は紅くなつていつた。

銀座節の一團が出て行つてしまふと、ホールの内はやゝ靜かになつたが、次第に夜が更けてゆくにつれ、一人去り、二人去り、さつきまでの騷々しさに引換へて、妙にひつそりとしてしまつて、蓄音機の「ユーモレスク」が、ひとり徒らにはしやいでゐた。

——と、そこへ、二人の客がはひつて來た。一人は洋服の上に雨衣を着、一人は和裝で洋傘のしづくを切りながら、入口の卓に腰を下した。美代子の番に當つてゐた。

「僕は、紅茶。」

と、雨衣の方がいつた。その青年の顏に美代子は見覺えがあつた。それはあの雜司ヶ谷の墓地で見た青年に違ひなかつた。

が、青年の方では勿論飽くまで無關心であつた。

「さあ、僕は——矢張りちよつと飲みたいね。」

和裝のやゝ年嵩の方はかういつた。

「飲んだらいゝでせう。」

「ぢや、ビール。ビールを一本——。」

と年嵩の方は命じた。

美代子は、命じられたものを二人の前に運んだ。

「痛快な事は痛快だがね。」

と、年嵩の方は、うまさうにビールを飲みながらいつた。

「しかし、瀾川のいひ草ぢやアないが、そこは矢張り人情といふものだらうね。あれが生みの親だと思ふと、何だか、ちよつと氣の毒にもなつてくるんだ。——使の者が來ていふんだが、先生すつかり悄氣込んでゐるのださうだ。怪しからん奴等だと口では怒つてゐるのだが、内心はすつかり弱つてゐるんださうだ。何だか哀れな老人だつて氣がするね。」

「そりやアね、僕だつて親父の事や、姉の事を考へると悲しくなつちやうよ。だけど、人情なんかに負けちや駄目だと思ひますね。ちつぽけな人情なんか踏み躙つて僕等は勇敢に進まなきやアね。」

青年は、若々しい眸をあげていつた。

「それはさうだ。——ところで君、戀愛といふものも矢張り一つの人情だらう？」

「それは、さうだらうね？」

「君は、戀愛についてどう考へるね？　戀愛もまた、踏み躙つて進むべきちつぽけな人情の一つだと思ふんかね？」

「戀愛だつて――。」

と、やゝ躊躇した上、決然としていつた。

「矢張りさうだと思ひますね。兎に角戀愛なんか、さう重を置くに足らんものだと僕は思ひますね。」

「僕もそれに異議はないのだが、君の戀愛觀がそんなんだと知つたら、多子の奴は失望するだらうよ。」

「何いつてるんだ！」

雨衣の青年は――千尋は、秀彦にさういはれると、ちよつと紅くなつた。

紅茶を一碗、ビイルを一本、それで二人はさつさと出て行つてしまつた。二人を送り出した美代子は、今の客のかけてゐた入口近くの椅子にぐつたりと坐り、ぼんやりと考へ込んだ。辰夫の姿を見たせゐか、それともこんなに雨の降るせゐか、今夜のやうに深く物の思はれる夜はなかつた。辰夫、庄作、萬千子、猪之助――それ等の人達の事が次から次へと思ひ出された。そしてあらゆる悲といふ悲が、みんな一度に胸に集まつて來るやうな氣がした。彼女は袂で顏を押へ、あまりに激しい人生を泣いた。

「美代子さん！」

と、仲間からさう呼ばれて、涙を拭うて立ちあがつた時、しかしそこには、あの猪之助の顏が描かれてゐた。特赦によつて刑期をちぢめられた猪之助は、さう長く待たせないで歸つて來るであらう。猪之助を思ふ時、美代子の胸には、ほの〴〵とした明るみが漂ふのであつた。

―了―

昭和四年八月十五日印刷
昭和四年八月二十日發行

定價壹圓九拾錢
郵送料拾貳錢

宴　饗

著作者　加藤武雄
發行者　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町　新潮社
電話牛込（長八〇五番、八〇七番、八〇八番、八〇九番）
振替（東京）一七四二番

東京小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

加藤武雄氏著作

■長篇小說 **珠を拋つ**
四六版紙裝 貳圓貳拾錢 送料拾錢
三人の女性と三人の男性との錯綜せる戀と運命を描いて、息をもつかせぬ興味の中に、嚴肅の主題を活現した大作。

■長篇小說 **久遠の像**
中版布裝 定價貳圓 送料拾錢
天才畫家と其の愛人との、戀と藝術との惱みを中心とせる、美くしく哀しき物語。層々の波瀾、興趣極めて深い。

■長篇小說 **惱ましき春**
中版紙裝 定價貳圓 送料拾錢
若き詩人、美しき處女、孤獨の教師等の間に彷徨せる主人公が、文壇に對する烈しき憧れと强き戀を描ける長篇。

■長篇小說 **東京の顏**
四六版紙裝 貳圓貳拾錢 送料拾貳錢
戀愛の惱みを中心に現代日本の全景を描ける長篇にして、今の動搖混亂せる思想と生活を展開せる八百枚の長篇。

■短篇集 **夢見る日**
中版紙裝 壹圓拾錢 送料六錢
愛犬物語▼過ぎゆく日▼嫁▼村の理髮店▼知らぬ世界▼憂鬱▼夜霧▼林の小鳥▼日曜日の小事件▼生別死別等。

■短篇集 **幸福の國へ**
中版紙裝 壹圓五拾錢 送料拾錢
幸福の國へ▼奇禍▼藥草の花▼春畫▼復讐▼拳▼遺留品▼小品三つ▼花嫁▼妻の云ひ分▼或る童話作家▼約婚等。

■短篇集 **處女の死**
中版紙裝 壹圓拾錢 送料六錢
美紗子とその妹▼城が島▼子供を打つ話▼仙太の戀▼N先生のビジョン▼母▼或る夕の事▼父▼平凡非凡等を收む

■短篇集 **土を離れて**
中版紙裝 壹圓拾錢 送料六錢
鳴咽▼母となる日▼鄕愁▼出發▼筏の上▼寂しき道▼闖入者▼土を離れて▼小さき謀叛人▼土の匂▼妻▼西風等。

◆都會へ（中篇小說）定價七拾錢 送料六錢

◆我が小畫板（感想小品）定價壹圓貳拾錢 送料八錢

■日本小說集（昭和四年版）

文藝家協會編
四六判紙裝 四百頁 定價壹圓七拾錢 郵送料拾錢

輕病兵…犬養健
競馬馬の如く…池谷信三郎
無駄な入獄…石濱金作
鴨獵…葉山嘉樹
密偵…林房雄
或砲手の死…細田民樹
誰もする中で…細田源吉
兄弟…戸川貞雄
時は過ぎたり…德田秋聲
早春の溫泉場…近松秋江
キリスト教文獻全集…尾崎士郎
文子…岡田三郎
短篇集…川端康成
微妙な貸借…片岡鐵兵
「シロ」の死…加能作次郎
續蘿洞先生…谷崎潤一郎
靴下だけの女…中河與一
お末（自叙傳）…室生犀星
過去…宇野千代
穴…黑島傳治
舞踏會餘話…牧野信一
愛情の一例…間宮茂輔
Yの投げた網…淺原六朗
魚の心…佐佐木茂索
木を伐る…里見弴
彼の名…三宅やす子
新開町スケッチ…宮地嘉六
彼等の戀…下村千秋
仕立屋マリ子の半生…十一谷義三郎
殿…平林たい子

■大衆文學集（昭和四年版）

文藝家協會編
四六判紙裝 三百八十頁 定價壹圓五拾錢 郵送料拾錢

戀情無明佛……土師清二
運不運物語……額田六福
增長天王……吉川英二
哲學亂醉……直木三十五
沙漠の美姬……國枝史郎
煎餅屋のお花……矢田挿雲
醫師免許證……正木不如丘
同じ道……松本泰
懷疑狂時代……小酒井不木
ニウルンベルクの名畫……甲賀三郎
刺客……今東光
惡夢……江戸川亂步
名君修業……佐々木味津三
野田山籠城……行友李風
討手……三上於菟吉
ばつさい……白井喬二
忠義迷惑……下村悅夫
網代の燒打……平山蘆江
桔梗原異聞……本山荻舟
裝幀……木村莊八

■新潮文庫■

一冊一圓 送料拾錢

小社こゝに社名を冠して一大叢書の刊行を企つ。萬人、必ず讀むべく、讀まざるを恥とすべき内外文藝の精粹を選んで萬人必ず購ひ得るの實費的廉價を以て廣く世に薦めんとするにある。我が文壇に於いて新しくして既に古典的權威を帶びたる作品を主とし、又我が新文藝に影響深き海外諸名篇の飜譯を交へ、凡そ文藝を念とする者の必ず再讀三讀すべき價値ある作物のみを網羅する。

(1) **藤村傑作集(一)** 島崎藤村著 16版
『嵐』を始め、伸び支度、分配、出發、海上、幼きものゝ死、子に送る手紙、熱海土産、貧しい理學士。千曲川のスケッチの十篇。

(2) **藤村傑作集(二)** 島崎藤村著 12版
彼女の生涯、食堂、三人、明日、芽生、伊豆の旅、河岸の家、孤獨、家畜、沈默、生ひたちの記、櫻の實の熟する頃等十三篇。

(3) **都會の憂鬱・田園の憂鬱** 佐藤春夫著 12版
一は村居一年、靜に田園の自然に親しんで其の感得せる所を描ける出世作。一は都會生活の惱ましき情景を描いた傑作。

(4) **破船** 久米正雄著 16版
文豪夏目漱石の娘冬子と若い作家小野と其友人杉浦との戀の三角關係を主題として、小野の失戀と苦悶を描ける高名の作。

(5) 增補 **學生時代** 久米正雄著 16版
悉く學生生活に題材をとれるもので、『鐵拳制裁』『結婚者の話』『艶書』等十數篇。若き人にとつて興味最も多き讀物である。

(6) **吉田絃二郎傑作集** 吉田絃二郎著 16版
父、熊のわな、島の秋、蝶叛人の死、彼岸詣りを始め、最近の大篇、石に擊たるゝ女等各時代の代表作を作者が嚴選された。

(7) **夜ひらく・夜とざす** ポオル・モオラン 堀口大學譯 14版
前者は六人の女性によつて戰後歐洲の淫蕩の氣分を描出し、後者は、四人の男性によつて頽廢の底の新らしい力を描く。

■新潮文庫■

(8) **近代情痴集** 谷崎潤一郎著 新刊
情痴の世界を展開し來つて、この作者獨得の戀慕性慾を描ける八名篇を收む。別に怪奇なる幻想を叙せる『異國綺談』五篇

(9) **戀愛合戰** 宇野浩二著 新刊
現代青年男女の性慾生活の赤裸々なる報告書。卷中の人物は文壇劇壇の知名の人人なので、「戀愛モデル合戰」と稱された。

(10) 增補 **夜の光** 志賀直哉著 新刊
著者の乏しき創作集のうち最も價値あるものとして推稱され、古典的權威ある『夜の光』に、十三名篇を增補して公にした。

(11) **藤村感想集** 島崎藤村著 新刊
藤村氏の三大感想集たる『飯倉だより』、『春を待ちつゝ』及び『佛蘭西だより』の三卷を一篇だも洩らす所なく收めた。

(12) 吉田絃二郎 **詩・感想集** 吉田絃二郎著 新刊
吉田氏感想の第一集より最近の集に亘つて其精粹を拔き、更に新作を加ふること二十五篇。吉田氏感想全傑作集である。

(13) **芥川龍之介隨筆集** 芥川龍之介著 新刊
文學を語り、世相を穿ち、身邊を記し、文壇人を論じ、心頭の小景を描き、書に叙し跋せるもの等、集めて二百十餘篇に及ぶ。

(14) 潤一郎 **犯罪小說集** 谷崎潤一郎著 新刊
四百枚の長篇『黑白』をはじめ、世の常ならぬ戀と罪との經緯より成れる七名篇を收めた。最も異色あり、最も興味ある集。

(15) 增補 **黃雀風** 芥川龍之介著 新刊
著者が最も圓熟せる時代の集たる『黃雀風』に加ふるに、『影燈籠』及び『春服』の二大集中の佳篇を選んでこの一卷とした。

以下續々發行 ═ 新潮社出版

佐藤春夫氏著　片多德郎氏裝幀及挿畫

小說　神々の戯れ

これは華麗にして憂鬱なる戀の繪卷であり、怪奇にして纖巧なる人生の唐草模樣である。超人の面影ある畫家高木と美しき童貞女麗子と、亂倫背德の醫師椿と賣笑婦マリと、無頼の混血少年三浦と、輕佻なモダン・ガアル榮子と、これ等の個性いちじるしき人物が世にも奇しき運命にあやつられて、互の生活を複雜に交錯せしめつゝ、こゝに一團の輪舞をなす。精緻なる現實描寫は豐饒なる詩情に統べられ、深刻なる社會批判は多彩なる幻想の底にきらめいてゐる。近時稀に見る興味深き傑作として、將又、流石にこの作者ならではと首肯せしむる藝術的芳香高き雄篇として一般讀書階級の愛讀を待つ。

善美を盡くせる特裝版

挿畫（口絵）二十一面（大模様）
總洋布金箔

四六倍判
紙數三百十頁
價參圓五拾錢
郵送料拾八錢

長篇小說　激流

三上於菟吉氏著

五百頁　壹圓
二十頁　七拾錢
拾貳錢

新しい『ナナ』

千葉龜雄

三上氏が、長篇作家としての才力は、もう試驗濟みだ。けれども「炎の空」の段階から進んで、この「激流」まで來ると、もうこれこそは、氏の作物境の、「最高層の成熟期を示す作物として最も意義のあるものだ。氏の年齡、廣い人生經驗、深い藝術經驗、これらの成熟が皆こゝに集大成されて居る。それは時代に敏感なこの作家が、題材として、時代と社會の深刻な機構を、最も大膽に捉へた最初の作物だからにあるらしい。有りやう、作家得意の、毒の華のやうにどす黑く、蛇のやうに執念深い戀愛場景も、啻に戀愛の爲に描かれたのではない。現代社會を横流する社會惡、經濟惡のどん底を、メスよりも鋭く暴露しようとした意識に、新らしい意義があるのだ。二人の異型の女性を繞つて、物質慾、階級慾、情痴、淫慾の葛藤が、どんなに深刻に展開するか。これをゾラの大作に比べて、新らしい『ナナ』だと名づけるのは似合はしくなからうか。

✓

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black